フリーター兼魔法使い

しいたけ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フリーター兼魔法使い

【Nコード】

N4066Q

【作者名】

しいたけ。

【あらすじ】

更新を無期限停止します

削除の要件には達していないようなのでこいつの形をとることにしました

0、鳥がなく

鴉がなく。

朝霧につつまれる廃ビルの屋上端、僅かに降る雨にうたれながら、しんと静まったその場所には、彼の鳴く声は誰にも届くことはない。彼自身も、その声は誰かに聞かせるためのものだとは思っていない。眼下の道路にも人の通りはなく、車の通りもごくまばらな、静かな朝だ。信号は規則的に点滅し、薄い霧の中で色を見せる。落ちていく雨粒は無秩序に街に降り注ぎ、薄い霧の中で音をたてるのみで。

「綺麗ね」

空を見上げた鴉の背中に、軽やかな声がかけられた。

誰もいなかったはずの屋上に、影が一つ増えていた。

「鴉のくせに、綺麗な声」

背後の声は、嫉妬のような、苛立ちのような、憎悪のようなものが混じった、雨のように冷たいものだった。いまだ若い少女のものである軽さには、幾つも感情が織り重なっているらしかった。

「綺麗じゃないよ」

ビルの縁に腰掛ける鴉が応えると、少女は鼻で笑った。鴉にはそれが、芝居がかった上辺だけのものに思えた。

「綺麗よ。最悪な気分させられるくらいに」

「最悪なんて」

最悪なんて、簡単には訪れない。鴉はそう言おうとしたが、途中で口をつぐんだ。勝手な物言いは自分を安売りしているのと同じだと、誰かに教わっていたからだだった。

「最悪。あなたの存在は、誰にとっても最悪で、最低で」

少女は鴉の言葉を遮るように強い語調で言う。

「殺したい？」

鴉は波風を立てぬよう、静かに訊いた。

「そうね。最悪さえ居なくなれば、十分だから」

「それは結構だ」

「人ごとのように言うじゃない」

そのとき鴉の背後から、何度も金属が擦れる音が聞こえた。

「話に聞いていた通り、本当に人を馬鹿にしたような態度を取るのね。番外の魔法使い、災厄の指『ヤタガラス』」

「……ああ、そうだ。呼ばれる度に思うんだよ。俺にそんな名前をつけるなんて、ヤタガラスを侮辱している。もともとヤタガラスは災厄を呼ぶ鳥ではない」

「そんなの、知った事じゃない」

少女の声に強い意志が乗っていた。同時に、金属が激しくぶつかり合う音が降りしきる雨のように何度も繰り返されていた。まるで鋼鉄の爪を研ぐような、そんな音だった。

今の彼女のコミュニケーションに伝えてしまえば、きっとこの廃ビルは壊れてしまうだろう。鴉はこんな静かな朝を、わざわざ自分の手によって壊したくはなかった。それに、もしかしたらこのビルにもまだ、使命が残っているのかもしれない。物であっても人であっても、誰かに存在を認められた段階で、何かしらの使命を負うことになるのだから。

「君のその殺意こそ、俺の知った事じゃない」

鴉はそう言う頭を下に向け、廃ビルから無造作に落ちた。

「待ちなさい！」

少女が鳴らす金属音の正体は鎖によるものだった。少女は槍のように尖る分銅のついた鎖の一本を、鴉の座っていた場所に高速で投げつけた。鎖が鎖とこすれ合う音が小気味よく、そして先端は真っ直ぐに雨の雫を弾いて走った。

「待って！」

分銅はコンクリートの一部を穿つが、鴉はすでに落ちている。投げつけた鎖を手に戻し、少女は走ってビルの端に駆けていくが、鴉

の姿は何処にもない。

見降ろした道路にも人影の一つすら存在せず、朝霧に消えた鴉の姿を少女が追うことは、もう不可能だった。

「待ってよ……」

のこされた少女がなく。

朝霧が消えていく街の中、僅かに降る雨にうたれながら。

1、探偵兼魔法使い

せんざきまさのり
千崎正規のATMの暗証番号は「8782」、「ヤな奴」に設定されている。

フリーターとして生活する彼の預金通帳には日々のアルバイトによる生活費が入れられているのだが、それ以外の仕事で稼いだ分と一緒にたにしてまとめていることに、自虐的な意味をこめているからだ。

千崎は「魔法使い」であり、魔法使いとしての仕事も行っていた。「魔法使い」とは常に歴史の裏側に生きてきた、人間でありながら人間ではないもの。過去の人類史における「魔女狩り」の対象とされたものとは起源を全く別とする、極めて特異な存在である。現代においては社会の調律を担う一つのファクターとして、魔法使いは魔法使いとしての立ち位置を明確にさせていた。一般社会の表層には決して現れることはない、あくまでも裏方という位置に居座っているのだ。

「金がない」

魔法使いの千崎は、スーパーの隅に置かれる一台のATMを前にして呟いた。月末の諸費雑費引き落とし日を前にしていながら、通帳の残高はたった三桁、「666円」と示されるのみ。

「何故だ」

着古したジーンズのポケットから取り出した携帯電話を開くと、日付はもう二十四日だ。コンビニのアルバイトの給料日は二十二日が常で、昨日の魔法使いとしての仕事による入金は既に済ませたとの連絡が入っている。

そして通帳からの引き落とし日は明日で、まだ私用で金を降ろしたりはしていない。

ならば。

「わからん」

何度確認しても残高が増えるわけもなく。千崎はATMの前で何度か首を捻ったが、観念して店を出ることにした。魚介売り場から聞こえてくる過剰にアップテンポな曲が千崎の肩を一層落とさせる。金がない以上、明るい気分にはなりようがない。

スーパーを出ると照りつける夏の太陽が全身を灼いた。喉の渴きを潤そうと思って入ったスーパーだったが、残高の関係上、余計な出費は避けなければならなかった。金がないのだから。

ビルの日陰に隠れつつ、次の仕事はいつになるかを思い出す。だが、魔法使いの仕事は覚えているところ入っていないかった。千崎はフリーの魔法使いで、魔法使いの事業組合に属していない。そのため仕事に派遣されることや、魔法使いを扱う個人や団体へ紹介されることもない。自身で仕事を受けなければ、本当に単なるフリーターなのだ。

昨日の仕事も偶然受けることのできた依頼だっただけで、定期的に寄越されるものではなかった。

つまり月末を前にしているにも関わらずバイト代が入金されていないうえ財布には千円札が一枚しかないという千崎の現状を打破するには。

これからさらに魔法使いの仕事をこなさなければならない。

「仕事はあるか」

千崎は歩きながら電話をかけた。二回目のコールですぐに繋がった。

「はいこちら綿貫^{わたぬき}探偵事む、あ……ようやく助手になる気になったか、千崎」

相手は千崎の知り合いで、たまに来る面倒な仕事を千崎に回す魔法使いだ。

「他人の下につく気はない。それよりもゴミ処理以外に仕事はないのか。金がない」

「は？ 昨日の仕事の分は？」

「振り込まれていない」

「……そうか、残念だったな。まあ、下種に依頼してくるくらいだ、使い捨てのつもりだったんだろう」

「そもそもお前が口頭で仕事を受けるからそうなるんだろう。せめて私文書でも書かせておけば訴えることができたんじゃないか」

「訴えたら逆に捕まるだろうが、誰と話してるつもりなんだよ」

「忘れていた」

「だったらお前こそ、いい加減魔法使いとしてまともなところに就職すればいい」

そのまま大通りを進むと、車道を挟んだ反対側の歩道に野次馬が固まっているのが見えた。ビルの手前で、パトカーが周囲に数台止まっている。入り口には黄色のテープが貼られ、警察関係者以外は立ち入り禁止にされていた。

「どうやら物騒な事件が起きている」

「唐突に何言ってるの。どこで？」

「俺が昨日、仕事をしたビルだ」

「……なぜそうなる……」

丁度ビルからは、神妙な顔をしたスーツ姿の刑事が数人出てくる場所だった。

綿貫の事務所は住宅マンションの一室、六 三号室に置かれている。部屋のドアには「綿貫探偵事務所」と書かれたプレートが貼られているが、一般マンションのため事務所として本当に機能しているようには見えない。千崎はその部屋のチャイムを押し、ドアの向こうで足音が聞こえてきたところで一歩下がった。

「遅いぞ千崎。ウチは駅から徒歩五分だろうが」

「俺の居た場所が駅から徒歩十二分だった」

ドアを勢いよく開けて現れたのは、黒のロングヘアを後ろでまとめた眼鏡の女性、綿貫真理だ。

「綿貫、風呂上がりか？」

「は？ すつぴんに見えるか？」

「俺は一日中Tシャツに下着姿でいると風邪をひく」

「私はひかない」

「なるほど、羨ましい」

綿貫は溜め息について家の奥に消え、「さっさと入れ」と手をこまねいた。

「片付いているな」

千崎は居間を見回す。小奇麗なフローリングの上にテレビ以外の家具一式があり、壁際のオフィスデスクにプリンターと、真っ白なA4の紙が山のように置かれているのが目立つ。

「忙しくはなさそうだが、生活はどうだ」

ソファに座って訊ねたが、綿貫はまた大きく溜め息をつく。そして背の低い本棚の上のノートパソコンを取り、床に仰向けに寝そべりながら開いた。

「綿貫、どうした」

「……なぜ私がお前を呼んだのかわからないのか」

「電話の最中にそのプリンタから紙が出てきたのだと思っていた」

「馬鹿か」

「純粹なんだ」

その言葉を最後に沈黙が流れ、数分間、キーボードを叩く音だけが鳴った。

「報道はまだされてないな」

「綿貫、何か事件でもあったのか？」

「……面倒だから端折っていいか？」

千崎がゆっくりと頷くと、「絶対理解しようとしてねえ……」と綿貫が小声で呟いた。実際、千崎は綿貫の考えを読む気は全くない。仕事にありつけると思ったから来ただけで、それ以外の用事に関知するつもりはなかった。

「お前、昨日の仕事しくじっただろ」

「しくじる？ 俺が、仕事をか？」

千崎は腕を組み、目を見開いて驚いた顔をした。

「しくじらない人間でもねえくせに何だその態度は。だったらなんでお前が仕事行ったビルに警察入ってんだよ、お前からさつき電話で聞いた分には殺人の予感しかしねえし。お前が金欠なのもそのせいなんじゃねえのか」

「入金は済ませたと連絡が来ていたんだが」

「単純にばっくれたんだろ。私らみたいな下種なんて、仕事の如何に関わらず金ふんだくろうとするのばかりだ。そういうのは扱うのが面倒だし、そもそも今回はつかえねーと判断したから縁切った、そんな感じだろ」

「ゲスなんて言い方はやめないか、少なくとも俺はゲスじゃない」

「んな話はどうでもいいんだっつもの、どこに目つけてんだよ」

「いや、この場合は耳じゃないか？」

「……めんどくさいからなくっていいか」

「すまん」

とりあえず謝ったのは、ここで「何を怒っているんだ」と口に出してしまうと本当に殴られかねない、と思ったからだ。綿貫は気の短い方ではないが、千崎に対しては沸点が低い。

「何がやばいつて魔法使いとしての仕事をした結果が、なんで一般の警察に引つ張られてるかってことなんだ、わかってんのか？」

「昨日の仕事は滞りなく終えた。警察が動いたのは別の案件だろう」

「あそこは廃ビルだ。人の出入りはお前達くらいしかない。しかもお前は基本的に怪しい」

「怪しくはないだろう……」

ノートパソコンからはTV放映の音が流れている。

「率直に訊くが、千崎、お前昨日何したんだ？ こっちに被害が来るようなら非常に面倒くせえんだが」

「例の『魔法の杖』を届けに行っただけだったんだが……。お前がゴミ扱いしていた程度の物なんだろう、品そのものに問題があったんじゃないのか」

綿貫は顔をしかめて、床にべたりと伏せた。

「そんなわけ……あんのか……？」

「俺にはわからない」

要点の掴めていない千崎はソファから立ち上がり、デスクの上のプリンタの元に移動した。コンセントは挿さっていないが、電源ランプは点滅している。

「こいつには頼れないのか」

千崎はプリンタを叩いた。

「そいつは私の意思で遣うことはできない。前に言っただろうが」

「無能な預言者だ」

「預言者は全能ゆえに口を嚙む」

「持て余しているだけだろう」

「お前がそれを言うかよ」

その時、床に寝そべる綿貫が振動した。同時に高い電子音が連続的に鳴り、綿貫は素早く、下着の腰部分に引っ掛けていた携帯電話を開く。

「はいこちら綿貫探偵事務所……」

彼女ははきはきとした声で電話を取った。姿勢は非常に悪く、目も半開きではあったが。

「……今からですね。勿論大丈夫です。是非お越しく下さい」

ぱたんと携帯を閉じ、綿貫はそそくさと別室に歩いていった。

「依頼か」

「ああ。ついでだからお前も待つてろ」

隣の部屋の様子は見えないが、クローゼットが何度も開閉されているところ洋服を取り出しているようだ。ドア自体は開け放たれているため、千崎はそのまま訊く。

「どんな依頼だ」

「さあ。今からお時間頂けますかって電話が来たただけだ」

「電話……いつの間に売り込みなんてしたんだ？」

「してない。でも一応、ネットのそういうアレには登録してる」

「ということ探偵の資格は持っていたのか」

「持っていることになってる。一応、それなりの魔法は使えるしな」
「なるほど。やはり日本の組合は本当に融通が利くらしい」

「そりゃそうだ」

綿貫がドアから現れた。黒のパンツスーツにインナーは白ブラウスでさつぱりとまとめられ、まともに仕事をしている人間のように見える。眼鏡も銀縁のものに換わり、結っていた髪は降ろされていた。

「相変わらず正装をしても探偵らしくない」

「そりゃあ、私は魔法使いだからな」

やってくるといふ依頼人を数十分ほど待っていると、綿貫のノートパソコンから夕方のワイドショーの報道が聞こえてきた。

『……本日未明、上那市西区、空町のオフィスビル街に立地する雑居ビルで、男性の遺体が発見されました。現場となったビルは現在使用されておらず、近く解体される見通しで……』

千崎はソファに座ってうたた寝をし、綿貫はオフィスデスクで依頼人のための契約書類を作っているところだった。

「おい千崎、起きろ」

「寝ていない」

流れてくる報道に耳を傾けると、例のビルでは二人の男が刃物によつて殺害されていたという。一人は入り口付近で血を流して倒れ、もう一人はビル内で死んでいた。犯人は未だ逃走中で、警察は捜査を続けているらしい。

「二人の男か。俺が杖を渡したのは一人だったが」

「もしかしてトラぶった？」

「俺がか？ そんな馬鹿なミスはしない」

「馬鹿か。渡した側の話だつーの」

それを聞いて千崎は少し、「魔法の杖」を渡した時の会話を思い出してみる。外では雨が降っていて、ずぶ濡れの金髪の青年が文句

を言いながらアタツシケースを受け取った、その時の会話だ。

「そういえば杖を渡した相手が、自分は杖の受取人本人ではない、というニュアンスの言葉を言っていたような気がする。はつきりとは覚えていないが」

「てことはそいつも使い走りか？」

「若い男だった。それは十分にあり得る」

「そうなるか……ビルの被害者の情報が少し気になる」

「まあ、いいだろう」

「よくはねえだろ」

綿貫は不服そうな声を出したが、直接の関係が無さそうだと分かった時点であり気にしていないようだった。千崎としても、自分に関係がない上、金にもならなそうな話に首を突っ込む気は更々ない。

「それより、次の依頼が気になるところだ。出来れば探偵業でないほうがいいな」

足を組み直し、千崎は一人で深く頷いた。

「千崎お前……ホントに現金な奴だな……」

「当然だ。俺には金がない。お前に電話をしたのも、元々稼ぐのが目的だ」

綿貫はボールペンによる手書きでの契約書を作成しながら、「だから助手になれつつあってんだろ」と小声で呟いた。だが千崎は、その言葉をまるで聞いていないような顔で無視する。

そして時刻が四時を前にしたところで、部屋の呼び鈴が鳴った。

「おっと、チャイムが鳴ったぞ綿貫。出るか？」

「微妙に調子上げてんなよ。お前が出る」

「そうか」

千崎はソファを立つと素直に玄関まで行き、ドアを開けた。

「……あれ……？」

玄関先では背丈の低い学生服の少女が、鞆を持って立っていた。

少女は千崎の顔を見るやいなや不可解だと言いたげな顔になり、千

崎の肩越しに部屋の奥を見ようと背伸びをする。

千崎は不審な相手の様子に合わせ、ドアを開いたまま動きを待った。

「すみません。あたし、間違えました？」

「……君は綿貫探偵事務所に？」

「あ、はい、そうです」

頷いた少女を爪先から頭の天辺まで見上げ、千崎は玄関のドアを大きく開いた。

「ここで間違いない。入ってくれ」

「あ、はい」

少女を先に部屋に入れると、千崎は外のマンションの廊下を見回した。これは事務的な意味もあるが、千崎自身の癖でもある。

「なるほど」

そして、誰もいないことを確認した千崎は落胆した。

あれくらいの年齢の子供に、家賃を払えるだけの報酬は期待できそうにない。

2、女子高生兼魔法使い

「あなたが綿貫真理さん？」

少女は早足で居間に入るなり、即座に言った。ドアを閉めた千崎が追いつくと、綿貫は電気ケトルを持ったまま、表情を固めて首を傾げていた。

「そうですが。ええっと……まずは落ち着いて、そちらのソファにでも座ってください」

綿貫は千崎をちらりと見て、穏やかな口調で少女に言う。

「急ぎの用事があるの。あたしの話を聞いて」

しかし少女は座ろうともしない。千崎は立つたままの少女を追い抜き、先にソファに座って彼女の様子を眺めた。

「おい座るな千崎。お客様に座らせてやれ」

「彼女は急いでいるらしい。話を聞いてやれ」

「そうです。あたしは急いでいるんです」

綿貫は溜め息をついて、キッチンにケトルを置きに行った。

「あー……なら率直に済ませるか。その子の様子を見る限りじゃ、『探偵』に用事があるわけじゃなさそうだ」

「いや、待て綿貫」

「今度は何だ」

「自己紹介がまだだ、落ち着け」

「水差したのお前だろ……」

少女はそわそわと落ち着かない様子で、学生鞆を握りなおしたりスカートのエを払いながら二人の様子を伺っている。

「やっぱとりあえず中学生、お前は座れ。千崎は立て」

「あたしは高校生です」

千崎が退いたソファに少女は座り、綿貫は低いテーブルを挟んだ正面にデスク用の回転椅子を引っ張った。

「そうか女子高生。まず名前は？」

「宮乃あさぎです」

「歳は？」

「十六歳です」

「何をしに来た？」

「あなたを『真理の目』だと見込んで、人を探して欲しいんです」

「なら帰れ。げつと、あうと、おぶ、ひあー」

さらりと綿貫は言った。宮乃は困ったような顔になって、両手を宙に彷徨わせた。

「……どうして？」

「私に期待されても、私の魔法は他人の期待には応えない。悪いがお前の知ってる『真理の目』とやらは、とっくに世間からお役御免を喰らってんだ」

千崎はそれを聞いて、今も電源ランプを点滅させるプリンタを見る。が、すぐに視線を二人へと戻した。

「じゃあ」

すると宮乃の目が鈍く煌めき、綿貫を真っ直ぐに捉えていた。

「あなたの『真理の目』の構成言語、あたしに教えてくれませんか」

魔法使いの行使する魔法は、一つの「現象」としてカテゴライズされる。

「現象」は、物質的である世界の要素が混ざり合った変化だということができ、魔法使いとなる人間は、無数に存在するその要素を並列的に観測することが可能である。

「魔法使い」にとつての「並列的に観測した世界の要素」は「言語」と呼ばれ、これを魔法として転用する場合、「現象言語」として扱うことを魔法使いは定義している。つまり魔法は魔法使いにより引き起こされる「現象」であり、「現象言語」によって再現される世界への能動的な変化といえる。

宮乃の言う「構成言語」とは、現象言語それぞれを繋ぐことにより発生する魔法を、一つのシステムとして確立したものだ。

「どうせ、女子高生には理解できない」

綿貫が吐き捨てるように言うと、宮乃は顔を赤く染めた。千崎にはそれが照れなどではなく、怒りで頭に血が上っているように見えた。

「完全な透写はできないかもしれない、でもあたしには、どうしても『真理の目』が必要な」

「未来を見通す事は自分の未来には繋がらない。それに、魔法使いが観測して理解までできる言語は各々で違うだろうが。鳥は水に潜れないし、魚は陸を走れないんだ」

「あたしは、人間が観測する言語を総て理解できる……私個人での観測は、人並みにしかできないけど……」

ノートパソコンから明るい音楽が流れ始めた。ワイドショーのコナーが変わったのだ。

「……軽く整理する。いいか？」

「はい」

綿貫はプリンタの横に積み重ねられているA4用紙とボールペンを取って回転椅子に戻り、ソファ正面のテーブルに置いた。

「宮乃あさぎ、女、十六歳。ああ女子高生だったか、身分証明書は？」

「学生証があります」

「コピーを取らせて貰えるか。あとで書類にまとめる」

「じゃあ？」

宮乃がおそろおそるといったように顔を上げると、綿貫は頷きながら用紙に書き込みを続ける。

「魔法使い綿貫真理として、一応依頼は受けることにする。依頼の内容は、構成言語の譲渡要請か。こういう話を個人レベルでするのは初めてだから、手続きで微妙なところがあるな……」

「え？」

疑問の色を浮かべる宮乃に、綿貫は無表情で応じた。

「なんだ？ お前の話をまとめれば、私が使えないから私の魔法

をもらう』。それだけだろ？ 仕事自体も、『真理の目』を必要と
していただけだと解釈したが、誤解してたか？」

宮乃は納得のいかない表情で口を真一文字に結ぶと、千崎のほう
をちらりと見た。

「誤解、ではない、ですけど」

「なら話は早い。譲渡についての手続きは明日中に済ませるから、
また明日ここに来い」

「っ 明日って！」

突然ソファから立ち上がると、宮乃は大声を上げた。

「遅すぎます！ 今日じゃなきゃ駄目なんです！」

「宮乃だったか。少し落ち着いてくれ、驚いた」

千崎はヒステリックに喚き散らしそうな彼女の様子にうんざりし
ながら、触れないように両手を前に突き出した。そのまま肩でもつ
かんで無理矢理座らせてやりたいものだが、訴えられたくもないた
めそうもいかない。

「ここに来てから落ち着け落ち着けて、最初から私は落ち着いて
います！ 問題はそんなことじゃないでしょう！」

「私としての問題は、お前と縁を切るのに一日かかるってことだな
俺には金の問題がある」

自分で口に出して、千崎はふと思った。このまま綿貫が魔法の構
成を教えて報酬を得るだけでは、千崎には一銭も転がって来ない。
それでは明日の家賃の支払いに間に合わない。大家との関係を悪く
はさせたくないため、滞納などもつてのほかだというのに。

「そうだ綿貫、この子からの報酬はいくらになりそうだ」

「こういう場合の相場も明日調べてみるが……。お前にはもちろん、
一銭もやらん」

「そうか」

千崎をきっぱりとはねつけた綿貫はボールペンを上げ、先端を宮
乃に向けた。

「ちなみに宮乃、あえてはつきり聞かせてもらうが金はあるのか？」

さすがに女子高生から絞り取るような真似はしたくないんだが、完全な個人の魔法の譲渡なんてのはごくごく稀なケースだ。私は相場を見て泣く泣く、それこそ法外ってレベルの金額を提示することになるかもしれない」

「だからそんなことより！ 今すぐに探して欲しい人がいるんですってばあ！」

宮乃は泣き出しそうな、金切り声ともいえる悲鳴をあげる。さらに何を思ったか、千崎が突き出したままにしていた両手を掴み、下に激しく振り始めた。

「落ち着け」

「落ち着いてますよお！」

このまま離せば今度は何をすることもわからない。最悪殴られそう。千崎はそう考え、そのまま黙って振られた。

「だったらそいつに頼んだらいい。お前が今握ってる千崎は、顔も頭も悪い上にセンスもないが、腕は悪くない」

綿貫の言葉を聞いただけでは信用に足りないだろう。というより、ここで自ら売り込みをしなければ自分の立つ瀬がないと千崎は考える。今までアルバイトの面接で、特に必要もない若干のアピール力を培ってきているのだ。相手が女子高生とはいえ、しないアピールよりするアピールだ。

「君の目にはわかるだろうが、俺は顔も頭も平均よりは悪くはない。ちなみに好きな色はピンクだ」

彼女の視線が綿貫に逃げた。

「綿貫さん！ この人以外に頼れる人はいないんですか！」

「明日以降なら」

「そんなんっ！」

掴んでいた手を勢いよく振り払い、宮乃はソファに倒れ込む。

「落ち着け」

「これが落ち着いていられますか！」

さっきまで落ち着いていると言っていただろう、という言葉を千

崎は飲みこんだ。

「とにかく、何をそんなに急いでいるのか聞かせてくれ」

「……昨日。正確には今日。見つけたんです」

「何を見つけたんだ？」

千崎はソファに転がる宮乃と目の高さを合わせ、平静を取り戻せるように訊いた。

「あたしが追ってる魔法使い、『鴉』^{からす}を」

静かに言って、宮乃は瞳を潤ませる。千崎は胸焼けのような思いに囚われながら、「なるほど」と返事をした。

「とにかく時間が無いんです、今度彼を逃したらと考えると……」

宮乃はソファに座り直した。

「敢えて訊くが、鴉というのは魔法使いの方が」

「はい。多分、綿貫さんみたいな方の業界では有名なんじゃないでしょうか」

「そうだな、フリーターの俺でも知っているくらいの魔法使いではある」

魔法使いは国から番号を与えられ、それ以外の国へと出ることは基本的に許されていない。これは魔法使いと魔法使いが属する国とが密接に 例えば軍事利用など 関わった場合、その均衡が崩れないようにするための形式的な手段の一つとして指定されるものだ。

鴉という魔法使いは、その指定番号がどの国にも存在しない。

そのため出生は誰にもわからず、誰にも管理されない、確認されている中で最も自由な魔法使いである。それを活かして殺し屋としての活動を中心に行っているという話も、魔法使いの間では有名な話だ。

「知っているなら、彼を野放しにしてはられない、とは思いませんか？」

鴉は元々『番外』として扱われ、その行いから常に誰かに狙われ

ている。個人にも、組織にも、人間にも、魔法使いにも。それでもはつきりと所在を掴めていないという現状では、一人が新たに動いたところで局面は変わらない。

そう客観的に千崎の意見を言うだけなら、この話は終わる。

しかしそれでは、金にならない。

「君は鴉を捕まえたいのか」

「そうです。できるだけ早くに」

「捕まえてどうする」

「あなたがフリーの魔法使いなら、それを訊く必要はありません」
「なるほど」

千崎は頷いて、綿貫を見た。手書きの用紙のインクを乾かすためか、片手でパタパタとつまらなそうに扇いでいる。

「綿貫、どうする？」

「私に訊くな。こつちの要件はほとんど終わったようなもんだ」

「なら俺は、この子の依頼を受けよう」

「本気か」

「ああ」

視線を綿貫から宮乃に戻す。と、宮乃は我慢し損ねたのであろう歪んだにやけ顔をしながら、両手を祈るように擦り合わせていた。

「なんだ」

「依頼を受けてくれるんですね！」

「具体的な依頼を聞いていないが、そうするつもりだ」

「依頼は、鴉を捕まえる、それだけです」

「期間と報酬は」

「いまこの瞬間から鴉の拘束まで、五十万でお願いします」

宮乃は学生鞆に手を突っ込み、ごそごそといじり始めた。

それを見ながら千崎は少し考える。家賃は六万のアパートなので、すぐに振り込めば明日の引き落としには間に合う。今のうちに彼女から金を受け取れば、自分の目標は余裕で果たされる。

「先払いで頼む。契約書は必要か？」

「鴉を捕まえられるなら、そんな面倒なものはありません」

「捕まえられなかった場合の対応も契約に入れるものだろう」

「捕まえられないんですか？ 腕はいいんですよね？」

「……ああ、確実に捕まえられはするが」

宮乃の学生鞆から白い封筒が出てきた。厚さは五ミリほど、確かに五十万の札束が入っているようで、まだゆとりがある。宮乃はソファの前のテーブルにその封筒を置き、すくりと立ち上がった。

「では着替えてきますので、三十分後にこのマンションの向かいのファミレスで落ち合いしましょう」

早足で玄関へと歩いていき、すぐにドアが閉まった。

千崎は宮乃の去ったソファに座り、置かれた封筒の中身を確認する。全て一万円札で、偽札であるようには見えない。

「どうすんだよ千崎」

先程から回転椅子に黙って座っていた綿貫が呆れた声で言った。

「ああ、このままではお前の仕事を奪ってしまうな。申し訳ない」

「馬鹿か。そっちじゃねえっつの」

「なら何だ？」

千崎が疑問の表情を浮かべると、綿貫は大袈裟に目頭を揉んだ。

「鴉って、お前だろ」

3、サラリーマン兼魔法使い

「なんで居るんですか？」

宮乃あさは千崎の席にやってくるなり、言った。

話の通り学生服から着替えており、上下をオレンジのジャージで揃えていた。頭には紺色のスポーツキャップを被り、傍目にはスポーツ少女にしか見えない。

「俺は君の依頼のために待っていた」

千崎は綿貫と共にファミレスへ入店して、禁煙席で宮乃を待っていた。隣の綿貫は暇潰し代わりか、先程からつまらなそうにカップのコーヒーにスプーンを何度も突っ込んでいる。

「あなたではなくて綿貫さんのほうです。しかも夏なのに、なんでホットコーヒーなんか飲んでるんですか……」

「私の体はややこしい」

宮乃の言葉に対して、綿貫は穏やかなトーンで返す。

「知りません。『真理の目』が使えないなら、あなたに用はありません」

「残念、こつちには野暮ったい用事がある」

宮乃はきっぱりと言いつつ千崎の正面に座った。先程の学生鞆を座った隣に置き、神妙な顔つきで両手を組む。

「まあいいです……それで、千崎さん、でしたっけ？ これから鴉を追おうと思うんですけど」

さっそく鴉を追うとなると、宮乃は魔法使いを追跡する何らかの方法を持っているのだろう。

「どうやって追うんだ」

「魔具を使って追跡します。先日市外のショップで色々集めたので」

宮乃は学生鞆から刃渡りの長い包丁やシャープペンシル、テレビのリモコンを取り出し、テーブルに広げた。

魔具とは有力な魔法使いが開示している構成言語を物体に付与したものだ。基本的には魔法使いの適性を持たない人間が簡易的に魔法を使用するためのツールで、実用性はかなり低い。

「ショップで簡単に買える程度のもものでは、鴉は追いつめられないだろう」

「出来る範囲で構成言語を書き直しているので、多少はマシになっていると思います。それに、あたし一人じゃ無理だと思ったから綿貫さんやあなたを頼ろうと思ったんですよ」

「なるほど。それで？」

「このリモコンを使って、カメラで捉えた範囲の時間を巻き戻して見ることができるようです。流動的な残留思念をカメラの範囲だけ疑似的に固定させて、連続で画像として出力することで巻き戻し映像にできるとか」

学生鞆からさらに小型の古めかしいビデオカメラを取り出し、リモコンと並べてテーブルに置いた。

「難しそうだ。使ったことはないのか？」

「一人でやったら変質者じゃないですか。それくらいはあたしもわきまえています」

ジャージ姿の少女がビデオカメラとテレビのリモコンを持って歩きまわっている姿は、確かに想像するだけで珍妙だ。

「それでお前の目撃した鴉を追うって感じか。便利だな、私も買おうか……」

コーヒートをすすりつつ、綿貫は片眉を持ちあげる。

「……いや、だったらなんでお前は私の魔法を必要とした」

「この魔具は捉えた地点の巻き戻しができるだけで、早送りはできないとか」

「あ、そ」

そして綿貫はまたコーヒートをすすり始める。

「それじゃあ行きましょう。あたしが鴉を見たのは、空町のスーパー近くにある廃ビルです」

「ああ。急ごうか」

学生鞆を背負い、宮乃は素早く席を立った。そのまま出口まで早足でさっさと行ってしまい、千崎もすぐ後を追おうと席を立つ。

「退いてくれ、綿貫」

だが隣に座っていた綿貫はカップを持ったまま、宮乃の背中を目で追うだけで動こうとしなかった。

「本気で、お前の考えを聞かせろ。空町の廃ビルなんて言ったら、もう確定じゃねえか」

千崎は宮乃の背中が遠ざかっていくのを見ながら、綿貫を見下ろした。

「さあな」

「このまま行けば、あの魔具ですぐにお前の正体は割れるんじゃないのか」

「さあ、な。正直俺にもわからないが、一応は大丈夫だと踏んでい

る」

「あの子は俺を前にしても、俺が鴉だと気付いていない。何故かはいくつか想像しているが、このまま俺に気付いていないとして依頼を進めていけば、おそらく滞りなく話は終わる」

その言葉に引っ掛かりがあったのか、綿貫は探るような目つきで千崎に視線を向けた。そして、彼にしか聞こえない程度の小さな声で言う。

「……だったらもし、お前が鴉だと気付いていたら？」

「それはあの子次第だが」

鴉の立ち位置について考えつつ、鴉が普段、どんな理由で人に追われているのかを想起する。それは大半が、あまりにも短絡的で稚拙でありとても非合理的なものであるが、視点を変えればごく正当ともいえる理由だ。

千崎はその場で平然と口を開く。隣の綿貫は無表情で、おそらく返答の言葉は想像がついているのだろう。

「場合によっては、殺すしかない」

陽が落ちていくのを感じながら、二人は宮乃の背中を追う。昨日千崎が「魔法の杖」を取引した廃ビルまでの道のりを進んでいることは明白であったが、宮乃の様子に千崎に対しての妙な部分は無かった。学生鞆を背負って迷いなく歩く姿は、ただの女子高校生ではない。

「あれ？ 警察が居ますね」

ビルの入り口には未だにテープが貼られている。昼に千崎が見た時よりも周囲の人数は明らかに減り、野次馬の姿もなく、警察官が二人見張りに立っているだけだった。

「事件があったらしい。ここで二人死んだ」

宮乃は表情を険しいものに変え、千崎を見る。

「……二人？」

「なんだ」

「いえ。二人とも殺されていたんですか？」

「ワイドショーによればそうらしい」

「そうですね……。残念ですね、鴉の仕業でしょうか？」

「そう考えるのが自然だろう」

「酷い話です」

宮乃はキャップのつばを両手で握り、「どうします？」と千崎と綿貫に向き直った。

「さすがに職質されるのも面倒だ、移動するか」

綿貫はそう言って、宮乃が背負う学生鞆を引っ張りつつ来た道に戻るように歩き出す。宮乃も当然ながら引きずられるように移動して、若干悲しそうな顔になっていた。

「使用できる範囲に制限はないのか？ カメラが映した部分全ての時間を戻して見られるなら滅茶苦茶離れていても問題ないだろうが、さすがに得体の知れないシヨップの魔具が、それだけ鮮明に全てを捉えられるとは思えない」

「すみません、あんまり使っていないのでよくわからないんです。やっぱり色々試してみてからのほうがよかったですね」

「いや、個人的に魔具で遊ぶのは好きだから許す。千崎はどう思ってるか知らんが」

綿貫は宮乃の鞆に腕を入れ、中をまさぐりビデオカメラを取り出した。それを千崎に渡すと、さらに今度はファミレスで宮乃が見せたりモコンを手取る。

「じゃあ何撮るよ？ とりあえず試し撮りだ」
歩きながら綿貫はリモコンを遊ぶ。

千崎も試しに受け取ったカメラを覗いてみると、街の景色と綿貫が黄色に染まって見えた。

「いや、これでは何も撮れない」
「は？」

「カメラ越しに覗くと、辺りが一面黄色になる」

宮乃を見ると、彼女は首を捻りながらカメラを奪い、千崎を撮り始めた。

「……ああ。これ、一旦捉える視点を決めたら動いちゃいけないですよ。そのまま同じ場所でカメラを構えて……」

「巻き戻していいか？」

綿貫が訊くと、宮乃はカメラを覗いたまま頷いた。

「……押した。どう？」

「あ。ん……ああ、見えました」

半開きの口をぱくぱくさせ、宮乃は空いている片手を千崎に向けて何度も振った。

「時間が戻ってるのか」

「ぼんやりした紫色の人が私の右から、あっちに向かってムーソーク歩いてます。あ、ちょうど千崎さんを貫通するところ、だと思えます」

「つまり、俺がここでムーソークすればその人間とシンクロするのか」

「しません。黄色の景色に人がムーンウォークしているだけで、千崎さんはカメラに写っていません」

「貸してくれ」

千崎は口を開けたままの宮乃の背後につき、カメラが上下しないよう宮乃の手ごと支え、彼女の頭の位置を横から奪った。

「近いです」

「我慢してくれ。カメラは動かせない」

カメラに映った視界は、やはり黄色がベースになっているように見えた。普通に見える視界に黄色の膜を張り付けたような具合だ。

そこに宮乃の言う人影があり、歩く姿勢を逆回しした形でカメラから遠ざかっていくのがわかる。

人影は体格程度なら把握できるが、顔の認識はおろか服の判別すらできない。黒に近い紫のシルエットが、人の動きを巻き戻して再現しているだけだ。視界の奥に反対車線の歩道も映るが非常に見辛く、紫色の物体が動くのを確認するのがせいぜいだった。

「そつえば宮乃」

千崎は全く実用的でないこのカメラに嫌気が差し、目を離して宮乃に訊いた。

「なんですか？」

「これを使用するのは初めてだと言ったか」

「初めて、というか。少し覗いてみた程度です」

「ならどうして構成言語を書き直せたんだ。機械のプログラムと同じで、構成言語は細かい仕様や運用体系がわからないと改良するのも困難だろう」

「あ、すみません。これは書き直してません。あたしが変えたのは、護身用の魔具を多少強力にしたくらいです」

綿貫が後ろからしきりに「見せる」と声を掛けていたため、千崎は位置を譲った。彼女もまともなものを見られなかったようで、すぐにカメラから目を背けていた。

「せっかく貯金をはたいたのに、難しいです」

宮乃は事件現場の廃ビルをコンビニの前で眺めつつ、カメラの利
用方法について語りだした。

方法は至って単純で、過去を見るといいう特性を使って廃ビルから
出てくるはずの鴉をビルの入り口で発見。そこから徐々に視点を移
し、足跡を追うつもりだったという。綿貫を頼りに来たのは、その
手間をまるごと省くためだ。

だが警察がビルで見張りをしている以上、あのカメラで時間をか
けて足跡を追うことすら厳しい状態となっている。

なので宮乃は本当に困った顔を見せ、すぐるような声まで出して
今も千崎を見つめていた。

「先程から訊くのを忘れていたんだが」

「はい、なんですか？」

「君はどうして廃ビルに鴉が居たことを知っているんだ？」

千崎は手詰まりをアピールする宮乃に、話題を振ろうというニユ
アンスで訊いた。もっとも千崎としてはこちらが本題、「鴉」とし
て聞いておくべき部分だと考えていた。

「それは……そうですね、一応、言ったほうがいいかもしれません
宮乃は言い淀むような素振りを見せ、コンビニ店内で立ち読みを
する綿貫へちらりと視線を移す。それを見た千崎は彼女がどうい
う立場の魔法使いであるか、ある程度の見当をつけることにした。

「鴉が居たと聞いたので」

「見つけたと君から聞いたんだが」

「目撃した人がいるなら、見つけたも一緒です」

「なるほど……」

誰に、いつ、それを聞いたのか。

千崎は少し考えたが、具体的に尋ねることにする。

「聞いたというのは、君が魔法の杖を奪った相手からか」

千崎の言葉に、宮乃の拳動は完全に固まった。

魔法使いというものは異質な存在である。

元々魔法使いと人間の相違点は、第六感的に現象を観測し魔法として扱うことのみで、それ以外は全て人間と同じなのだ。よって魔法さえ使わなければ、誰も疑うことのできないただの人間でしかない。

整った社会の基盤を造ったのが人間なのだから、その上に住む魔法使いは人間のルールに従うことでその一員となることができる。逆にいえば人間のルールを魔法という異質なもので破ることで、魔法使いは確立された人間社会から排除されてしまう。

だからこそ千崎や綿貫、それに宮乃あさぎも、基本的には人間社会を支える一つの要素として生活しているのだが。

魔法使いというものは異質な存在であり、同時に誇りの高い生物である。人間としての能力の上に魔法という能力を使えるのだから、魔法使いの誰もがそう考えるのは必然だ。

そのため魔法という強力な武器を後ろ盾として、社会の中心にある人間に働きかけをする者も少なからずいた。それも裏で引く者として、魔法使いの役割を人間社会に根差したのだ。

「魔法使組合^{まほうし}」は近年、その経過によって世界各国に成立した。

そして日本における魔法使組合は、企業グループ、警察組織、暴力団などの各種組織での魔法使いの利用について、国内の法整備の怠りを理由として詳細に閑知していない。一般に「存在しないもの」として扱われる魔法に対しては、法律がどうあったとしても大きな問題にはなりえないのだが。

結果的にその現状が引き起こしたのは、組織間の魔法使いによる水面下での抗争だ。法に縛られにくい魔法使いを雇うことによって、民間や公安、それ以外のアウトローな団体でも、まるで兵器のようなバツクを持つことが可能になった。

それにより魔法を巡ったせめぎ合いが少なからず起こっており、日本は世界の中でもかなり頻繁に魔法使いを扱っている側面がある。

昨日千崎が取り扱った「魔法の杖」も、そんな争いの一部に使われる、はずなのだ。

「え、つと……？」

宮乃は我にかえったように、自分の瞬きを何度か確かめるように行う。

「俺はフリーの魔法使いなりに、色々とツテがある。魔法の杖を扱おうと考えている団体や、その取引の状況についても、少しだけ」
彼女の曖昧な態度を受け、千崎は嘘をついた。

「おそらく、元々君は鴉を追っていたわけではないんだろう」
仮にいずれかの組織の依頼によって鴉を追うのだとしたら、宮乃に単独で追跡をさせるのは非合理的だ。ましてや高校生の魔法使いに番外の殺し屋を追わせたところで、得られる結果はない。

そう考えれば、彼女は個人で鴉を拘束しようと考え、綿貫に協力を仰ぎに来たということになる。

「どうしてわかるんですか」

「君は今日鴉の存在を知ったらしいが、先程使った魔具の方は、いつ購入したと言ったか自分で覚えていないか」

「……」

宮乃は拳に手をあて、考え込むような素振りを見せた。

「それと杖のことに、なんの関係があるんですか」

「それに。君は言っていたな。自分は他人の観測した言語でも理解できる、と」

魔法使いそれぞれでしか扱えない言語という要素を、他人から伝達するだけで理解し、自分の魔法として転用する。それは、異国の人間が本による知識もボディランゲージも無しに、突然相手の言葉を理解して会話をし始めるようなものだ。

そんな事象を引き起こすものは、魔法使いの世界では一つしかない。

「その特性を、俺は『魔法の杖』の力以外に見たことがない。加え

て、元々君がそれをできるなら、魔具の改造を半端にさせておく意図がわからない」

「それは、ですね……」

綿貫はコンビニのガラス越しに、目を鈍く泳がせる宮乃を見つめていた。

千崎も目を見開いたまま静止する宮乃に顔を向け、さらに言葉を続けた。

「ここからは俺の想像になるが、いいか」

宮乃は反応する気はなさそうだった。

「君は魔法の杖を運ぶ仕事を与えられ、あの魔具を買い集めて準備を整えた。これは、普段から行っている君の仕事としてのものだ。そしてあの廃ビルに行き、君は魔法の杖を手にした。そこからの過程についてははっきりわからないが、そこで君は鴉がビルにやってきていたことを知った」

話しながら千崎は、殺人事件があのかのビルで発生していたことを思い出す。

「そして君は魔法を杖を手に入れたことで、鴉を」

「千崎」

綿貫は既にコンビニから出てきており、千崎のすぐ横に立っていた。

「なんだ」

「詮索は必要か？ お前は黙って鴉を捕まえりゃいいだろうが」

「依頼人がこれからトラブルに巻き込まれる可能性を把握する必要があるだろう。俺が判断するところ、宮乃は魔法の杖を今も所持している」

魔法の杖は、古くは力のある魔法使いが所有し丁重に扱われていたもので、現在も魔法使いの間で使用される大変貴重なものだ。杖は個人の言語への理解を深め、魔法をさらに強力にする可能性を秘めているとされる。そのため杖の全体数に対しての需要が圧倒的に多く、杖一つを巡る小さな衝突も少なくない。

昨日、綿貫が千崎に杖を運ばせたのも、その有用性のため他所から強奪されることを防ぐ意味があった。

そのため現在宮乃が魔法の杖を握っているならば、これから得体の知れない人間に狙われることはごく自然な流れだといえるのだ。

「……んで。これから巻き込まれるトラブルっつーのが、あれかよ」
綿貫は車道を挟んだ反対側の廃ビルを向き、軽く顎でしゃくつてみせた。

車道を一切確認せず、制服を着た警官がまっすぐ千崎の方へと歩いてきていた。廃ビルの入り口で、見張りをしていた警官だ。

「あれも、トラブルの内だろうな」

力なく警官を見ようとしたりした宮乃の視線を、千崎は背中であけた。

彼らの背後のビルの入り口にはテープが貼られている。念のため彼らの肩越しにバリケードテープを確認すると、そこには「警視庁」の文字も、県警の表示も無かった。

「……大丈夫なんですか？」

背中越しに小さな声で宮乃が尋ねるが、千崎は応えることはせず、ただ彼らを見つめていた。

「失礼ですが、お時間よろしいでしょうか」

警官の一人が千崎らに向けて笑顔を見せた。もう一人の男は三人を探るような目つきで眺めており、特に宮乃の学生鞆を気にしている。

「職質ですか？」

千崎は軽めの声を意識して、笑顔の警官に言った。

「はい、そうですね。この辺りでちょっと事件が発生しまして、周辺の見きこみを行っているんですよ」

「大変ですね、お疲れ様です」

「ありがとうございます。なので、少しだけ協力していただけると嬉しいのですが」

千崎はそれを聞いて、相手の警官を真似たような笑顔になった。

「お断りします」

警官は目を丸くし、もう一人と顔を見合わせた。

「時間はそれほど取らせませんので」

「すみません、僕らこれから空港行くんで」

「一応こちらでも仕事なので、本当に少しの間だけお願いできませんでしょうか」

千崎は首を横に振った。

「明日は株主総会があつて急いでいるんですよ。セガミ住宅の総会なんですけど、なんだか親父が出席できなくて。かわりに僕が顔だけ出せて話になつたんです。それでせっかく上京するんだから、姉と妹も観光ついでにどうかと思ひまして」

その言葉を聞いて、警官は怪訝な顔になる。千崎の背後ではさらに、綿貫と宮乃も不審がるような表情になっていた。

「株主総会？ 七月のこの時期に？」

「はい。臨時に、だそうで。あそこ最近急に伸びてきていて、色々ばたばたしているらしいんですよ。まあ、親父から少し話を聞きかじつたくらいなんですけど、この前はなんだつたかな」

千崎はわざとらしく「やれやれ」と首を振る。

「彼らは絶対転ばない。まるで最初から転ぶのを知っていて、あらかじめ杖を突いているようだ、とかね」

そして身を翻し、綿貫と宮乃を見た。

「……さあ。あさぎ、姉さん、急ごうか。このままではとてもじゃないが、間に合わない。タクシーを捕まえないと」

「姉さんじゃねえぞコラ」

だが綿貫は眉間に皺を寄せ、古いタイプの不良のような睨みを利かせていた。

「いや……そこに噛みつかれても困るんだが……」

と呟いても、その睨みは変わらない。

「挑発してんのになんで逃げんだよ」

「挑発？」

「つたく」

綿貫は目を丸くさせる千崎の横を過ぎ、仏頂面で宮乃の鞆を観察していた警官の目前に進んだ。

「お前らも少しは頭使えつつの。なんでよりによって警察なんだよ、馬鹿か？」

「あの……何を言ってる……」

「てめえらの目的は判ってるんだよ。動くならさっさと動け、トロクせえことばっかしてっから捕まるもんも捕まんねえんだぞ」

「いや、ちよつと……」

笑顔だった警官は慌てた様子で綿貫をなだめようとするが、その方法が思いつかないらしい。

「だったら、素直に職務質問に応じればいいんじゃないですかね？」

そう言ったのは、警官二人のどちらでもなかった。千崎がそちらを見ると、サラリーマン風の若い男が立っていた。

時刻は既に五時を過ぎ、普通の会社員が帰宅中であっても特に不自然はない。路上で職務質問に応じない不審な集団に、声を掛けて説得をしようという正義感があっても、おかしくはない。

「それとも職質に応じると、何か不都合でも？」

しかし千崎の目には見える。

太陽に映る彼の影が、僅かに歪み、彼の姿よりも僅かに大きく地面に映っており、虫の大群のようにぐにやりぐにやりと蠢いている。静かに立つ彼の姿とは裏腹に、餌を見つけて喜んでいるような活発さがあつた。

彼は宮乃をじっくりと見ながら、口角を吊り上げる。

彼の足元の影の一部も、応じるように鋭くなる。

「もしも後ろめたいことがあるなら、今すぐに頭を垂れるべきだ」

そんな現象が起こることは自然にはありえない。

そんな現象を起こしてしまうのが、魔法使いなのだ。

4、二ト兼魔法使い

彼が接触してきた瞬間、動いたのは綿貫だった。目前の警官と顔を見合わせて、サラリーマンの間と視線を往復させる。その後さらに千崎に向くと、呆けたように口を開けた。

「…………こいつら本物？」

綿貫が尋ねると千崎は頷いた。

「適当にカマを掛けたが、反応が鈍すぎるところを見るとそうだろう。確かに持ち場を離れる警官というのもどうかとは思う」

言葉の直後、警官も何かリアクションを見せると思っていた千崎だが。

「わかるよ。そういうわけのわからないことをするから、一般人は邪魔なんだよねえ」

太陽を背にしたサラリーマンが言う。

その直後、二人の警官は道路に倒れ込んだ。その様子を見ると、警官の顔は黒の仮面のようなものに覆われており、そのためか気を失っているようだった。仮面は穴のないのっぺりとしたもので、金属的な光沢がうかがえる。

「趣味が悪いな」

千崎が言うと、サラリーマンは貼り付けたような微笑を浮かべた。「趣味の悪さなら。そちらの方が上だと判断させてもらっているよ、

『フリーター』の千崎君？」

「フリーターを強調するな、サラリーマンめ」

まともな職に就いている魔法使いにはろくなやつがない。具体的な理由は無いが、千崎のイメージはそう固まっている。別に相手がサラリーマンであると自己紹介したわけでもないが、決めつけて障害があるわけでもないため、そういうつもりで静かに睨む。

「サラリーマンじゃないよ。ほら、手ぶらだし」

その相手は両手を力なく振り、あっけらかんと言った。

「なんだと……」

千崎が絶句すると、サラリーマンのような男は目を細めた。

「僕は前島^{まえじま}。ニートだ」

彼は腕を組み、後ろに振り返って笑みを見せた。

「……ニート？」

息が詰まりそうなほどに誇らしげな彼の姿には、感服すら覚えてしまいそうになる。かつて千崎の前に自分が社会不適合者であると胸を張った者は居ただろうか。いいや、居ない。

つまりだ。彼は表向きニートというだけで、

「そうか、『本業』が魔法使い、というわけか」

裏の仕事を中心に生計を立て「おとといまでは完全なニートだったよ」ていなかった。

「……」

今ここでどう手を打つべきなのだろうか。彼がニートであることを主張している以上、千崎に何も言うことはない。警官に起きた現象を見る限り、普通の人間が仕込めるようなものではないことは明白だが、フリーターである千崎にニートとしての彼の所業を追求する資格はない。ような気がしていた。

「八年前の成人式に着て以来のスーツなんだけど、女の子を連れ去る正装には少し似つかわしくないかな」

「八ね……いや……」

前半部分に引っ掛かりを覚えたが、千崎は宮乃に目配せをした。

「やはり彼女が狙いか」

「そうだよ。魔法の杖を持っていると聞いて、久しぶりに稼いでみようと思ったんだ」

「誰からの情報だ」

「ニートの情報収集力を舐めないで欲しい。統制の取れていない企業くらいには手が伸びるんだ、誰から、なんて形式は取らない」

「なるほど」

前島が事実を言っているかは判断のつかないところだが、宮乃を

狙っている以上はさらなる接触も避けることはできないだろう。

千崎は倒れる警官の姿を見て、前島がどういった魔法を使うのかを判断する。人間の顔を何かで覆わせるとなると、どういった事象に関わるものなのか。

「やるのか、千崎」

綿貫は宮乃の近くまで下がり、前島を睨みつけながら言った。

「ここで派手な争いに発展させるつもりはないが、彼次第ではどうなるか」

「必要以上に手を出すなよ」

「わかつている」

言い切る直前に、前島の影の一部が異様に伸びていることに気付いた。

「僕が彼女をさらうとするなら、やっぱり君が邪魔をするということになるかな」

地を這う細長い影の接近だった。動く影の上には漆黒の物体がせりあがっており、千崎の爪先に到着すると風船のように急速に膨れ上がった。そして物体は瞬時に鋭い爪をもった五指の手へと形を変え、千崎の右足を握りつぶすほどの勢いで掴み取った。

「そうなるな」

しかし直後、千崎から前島の間五メートルほどの歩道がまとめて爆ぜるように吹き飛んだ。千崎は自由な左足で、右足の少し先の地面を踏み壊したのだ。その衝撃で地中に潜っていたらしい黒い物体は歩道ごと折れ砕け、足を握る手も力を失った。

「綿貫、宮乃を連れていってくれ」

「別にいいけどな、お前通報されんなよ？」

綿貫は眉間に皺を寄せていた宮乃の腕を掴み、駅の方角に向かい早足で歩きだした。

「……道路を破壊するとどういう罪に問われるんだ」

千崎が呟く中、足元の影は気を取り直したのか破損した歩道の上

を走っている。

「やはり気持ちの悪い魔法だね。とにかく、さっさと君を退けないと僕の報酬がパアだ」

前島が感情のない声で言うと、一本の影が枯木のような姿に変わった。枝先の一本一本が刃のように尖っており、先程足を掴んだ手を考えれば、それらが飛び出してくるのは容易に想像できる。

千崎はジーンズのポケットをまさぐり、家の鍵を取り出した。長さは六センチ程の、何のへんてつもない鍵である。

「報酬……」

ふと、このまま宮乃から杖を奪い他の団体に売りつければ、さらに稼げてしまうことに気付いた。その選択がアリかナシかで言えば、ナキニシモアラズというところ。所持金に大きな余裕ができるのなら万々歳で、千崎としても面倒な魔法使いの仕事をしなくていいのだから、もう少し切羽詰まっていればそうしていたかもしれない。だが、もうキャッシュで支払いを済まされている。人情を重んじるわけではないが、契約は果たさなければならぬ。

「そう、報酬だよ」

「ニートのくせに何を言う。突発的な労働意欲は長く続かない」

「フリーターには関係無いよ。それとも君は今、他人の財布の紐を握るような仕事でもしているのかい？」

「そんな趣味はない」

一方で足先に伸びてきている影は、ベきんと音を立てて地面から跳ねあがった。影は剣山のように千崎の真正面から迫ってくる。実体を持った影は硬質な刃と化しており、千崎は手に持った鍵で、横振りにその一本を弾いた。

金属が擦れ合う音が鳴った。弾いた一本は折れたが、刃は当然それだけでなく、勢いも生きている。

「ところで、コンビニ店員に見られると困らないのか」

叩き下ろすように腕を振るい、多重に迫る影の刃をまとめて払った。

「それで困るほど人間社会は柔軟じゃないよ」

滅茶苦茶な言い分のように一瞬間こえたが、ある意味正しい。この場で二人の不審者が妙なことをして暴れていようが、基本的に通行人は無頓着で、自分の身を守ることにしか考えない。警察を呼ぶのも面倒だし、関わり合いがなければそれでいいと考える人間が大半だ。もしも店舗に被害が来るようなら、当然被害者として届け出を出すだろう。

千崎が後退しながら刃を弾き終えた頃には、前島の影はさらに激しく蠢いていた。

「だけど。その社会が立つ世界はこんなにも柔軟だ。不思議だよね」
前島の影の両手から急速に黒柱が伸びる。するとほぼ同時に前島本人の手にも、振り回すには丁度良さそうな野球バットほどの黒柱が伸び、握られていた。

「お前が指している世界は、いつも辻褄合わせに忙しいな」
ここまでの前島の行動を見る限り、彼は影という現象を操っている。

それだけだ。

「そうだろう？ そう思うだろう？」

前島が納得したように頷くと、地面の彼の影はさらに様相を変えていった。

「……さて。僕も久々の魔法の感覚に慣れたところだし、急がせてもらおう」

頭から肩にかけて彼自身よりも一回り大きい影が広がり、下半身は膝関節部のみが出っ張った。両手の棒は先端を尖らせ、剣のような姿になる。

影と同じく、やはり前島の姿にも異変があった。頭には丸い黒のヘルメット、肩には鉄球のようなシールドパッドが覆い被さり、頑丈そうな漆黒のプロテクターが膝に装着されていた。

「アメフトのような格好だ」

千崎が訊くと、前島は両手の黒剣を軽く振った。

「厳密に言うなら、アメフトに膝のプロテクターは要らない」

ぼそりと言って姿勢をゆっくりと前傾にしていく前島に対し、千崎は頬を引きつらせた。

さすがにこんな場所でこのまま彼の相手はしてられない。道路も破壊してしまったため、近いうち確実に面倒なことになる。なにより警官が二人倒れたままで、もしかしたら誰かにもう通報されているかもしれない。周囲の声は聞こえていないためすぐ近くに目撃者は居ないようではあるが、実際のところ誰に見られているかわかったものではない。

綿貫の「通報されるな」という言葉を思い出しつつ、目前の前島の姿を見た。

まるで試合開始直前のラインメンのように、タックルをぶちかましてやるうというオーラがありありと感じられる。剣を持つ手を地面についた瞬間、一気に突撃してくるのが瞬時に想像できた。

「そうだな」

前島の行動に対して瞬時に思考し、千崎は考えをまとめた。

逃げ切らない程度に、その場から逃げる。

「行くよ、フリーター」

「格好をつけるな、ニート」

前島が突進を始めた。

同時に、踏み碎いていた地面の一部、拳に握りこめるほどのコンクリートの塊を拾い、千崎は身を翻して走り出そうとした。

二つに一つだ。この変質者前島を警察に通報するか、人の居ないところへ逃げ彼を叩き潰してしまうか。前島が警官二人を失神させていることを考えれば、後者の方が確実ではあるが。

「ああ、待ってくれ！ 重いんだ！」

千崎としては、前島はそれほど悪い人間ではないような気がしていた。彼がニートだと知った段階で、同類の匂いのような親近感を覚えていた。フリーターとニートの間には絶対的な壁があるのだが、千崎はどちらかといえばフリーターには向かない無気力派であり、

おそらくその無気力の理由も彼と大きくは変わらない。

一部の魔法使いからすれば人間の一般的な労働は非効率なのだ。人間社会に公な魔法使いの機関さえあれば、千崎も前島もこのようなことはしていないに違いないだろう。

「久々の仕事だつていうのに……」

今のところ自称だが、前島というこの二ト野郎に、このようなやる気を出させる仕事コンビニで買えるような求人情報誌に載っているとは思えない。

魔法使いの職業案内所が、どこかにあればいいのだが。

「うん……できれば逃げないでほしいな……」

そして千崎が前島に背を向け、逃げの姿勢を決め込んだ途端。

空気を揺らすような強烈な金属音の後、右手の車道の乗用車が、前に回転しながら宙に飛び上がった。

「僕としてもね、千崎君」

背後の前島が呟いた。

直後、乗用車はボンネットから地面に着地し、形をひしゃげさせながらコンクリートの上を滑りこむ。鉄塊ががりがりど地面を削る音が耳を裂くようなほどの響きを聞かせ、千崎の足をも止めてしまった。

「人の目を気にしたいし、余計な怪我人も出したくない。綺麗事のように聞こえるかもしれないが、そういうものは何よりも面倒だからね」

穏やかな声で前島は言う。ブレーキ音やクラクションがビル壁を反響し、何処かからの悲鳴も拡散していく中で、彼の声だけは淀みなく、千崎に向いていた。

「だけどね　　に　　」

前島は続ける。千崎は車道をちらりと見て、腕で顔を覆った。すぐさま転倒した車が炎上を始め、爆ぜた。ひしゃげた車の爆発による衝撃と轟音に、千崎の耳は一瞬潰されてしまった。

「魔法使いという個体は、被害者となる人間よりもはるかに生物として優れている」

爆風の反動から立ち直り、千崎はようやく前島に振り返った。

「何が言いたい」

「僕はこの仕事のためなら。彼らへの被害、いかなる損失も辞さない」

十メートルほど離れた前島の背後には巨大な黒い壁が立っていた。彼の立つ歩道から、車道を挟んだ反対側までの全てを断絶するように。足元の影も千崎のすぐ手前にまで伸び、その範囲までの光を完全に遮っていた。

「見誤った」

独り言を呟いた千崎に向け、前島の「影」は伸びる。遮光によって現れる影ではない、前島が操る影だ。

「辻褃合わせを逆用しているのか」

「ご名答だよ、千崎君」

黒の壁から千崎の真正面に、顔をまるごと吹き飛ばすかのような勢いで黒柱が伸びた。千崎はそれを屈んで避けるが、足元では影が蛇のようにうねり、巻きついていった。

「これで僕の仕事は終わりだ」

千崎の足にさらに深く黒蛇が絡みつき、その尾は地面と一体となっているのか全く動かない。力で振り払ってみようとすると、自力のみでは外れそうにない強い拘束だった。

「厳しいな」

千崎は顔をしかめて呟いた。

前島は影を操っている。それだけなのだが、その対応に困っていた。影は光の遮光による現象であり、彼がそれを観測し言語として利用、つまり影を操るということに繋げているのだろう。

「俺が辻褃を曲げるには、どうしても骨が折れる」

影が生まれるということは、現在の状況では街の太陽光を遮るということになる。

だが前島が操っているのは影のみであり、その遮光するはずの物体は存在しない。これでは「人間の観測している物理現象」と辻褃が合わなくなってしまうため、大多数の人間により観測される世界は、辻褃合わせに黒の物体を前島の影として強制的に存在させている。

魔法使いの使用する魔法には、現象を起こすと同時に「辻褃合わせ」が発生する場合がある。前島の影を操るという魔法も、世界の物理介入によって凶器に転用しているのだ。

「君なら、どうせ直ぐに打開するんだろう」

足を拘束された千崎に、黒の壁には何本もの黒柱が見えていた。

狙いは正中線を狙っているのか真正面から縦に並び、無機質に千崎を見つめている。

千崎は目を閉じ、先程拾ったコンクリートの塊を左手の甲に乗せた。

「気は進まないが」

黒の壁から黒柱が八本、多様な軌道で千崎へと飛び出した。

右手の掌をぴんと開き、千崎は素早くコンクリートを叩き潰した。

「何を……」

前島はその行動を凝視し、千崎の手から鮮血が飛び散った瞬間に目を丸くする。

千崎の掌には、コンクリートが深々と突き刺さった。流れる血は熱く、裂けた皮膚は焼かれるように痛み、千崎の脳を刺激した。その感覚はまるで火炎のように、痛覚によるイメージが脳の奥で一気に滾っていく。

「炎だ」

迫る黒柱が八本、千崎が払った右手によって消滅した。

手には煌々と燃え上がる赤色の炎が灯っており、掌に突き刺さるコンクリートは発火の瞬間に抜け落ち、路面に火山弾のような姿で転がった。足元の蛇もそれにより消え去り、拘束が解かれる。

影を消された前島は、千崎の手を見て信じられないといったよう

な顔をした。

「……君の魔法がどんなものなのか、思っていたよりもわからないね」

「光を作った。それだけだ」

そうすれば少なくとも、前島の操る影は消える。その辻褃合わせに、現れた物体も消えるはずだ。

「それだけと言うけど、なんだいその傷は」

燃える千崎の手からは、沸騰した血が溢れて出していた。地面にぼたぼたと音を立て、痛みそのものを外に逃がしているようにも見えた。しかしその痛みこそが、千崎の灯す炎の礎だった。

千崎の魔法は、自身の心象そのものであるといえた。爆ぜると思えば物は爆ぜ、燃えろと思えば物は燃える。凍れと思えば凍るし、裂けると思えば裂ける。

しかし千崎にとつては心象、『イメージ』というものを、全くの無から想像することがかなり難しかった。端的に言えば、千崎には想像力がほとんど無いのだ。例えば腹が減ったからといって、目の前にハンバーガーが降ってくるということをストレートに想像することができない。そんなことがあってたまるか、とすぐに頭の中で考えてしまう。

彼が炎を起こすためには相応のイメージが必要になり、雷を起こすには電気的な刺激を受けなければならない。鉄を強く握っていないければ人間の体以上の硬さを想像できず、体を金属のように強固なものとすることもできない。

その根底には、「人は超常的な力を持ってない」という無意識の否定観念があるからだ。

だからこそ千崎は、誰か、何かに頼らなければならない。

『脳内現象の一次的な具現』という絶対的な魔法を、信頼できていないために。

「魔法だろうな」

「そうかい？」

前島は首を捻り、両手を掲げた。

背後の黒の壁がばきんと音をたて、怯えた針鼠のように変形した。鋭い先端は無数に、高さ六メートルほどまで伸ばされ、そのどれもが明後日の方向を見ていた。

壁で完全に封鎖されていた道路は変形によって露わになり、乗用車が列を作っていた。歩道では一般人が驚いた顔で携帯電話を構え、その数は少くない。先程事故を起こした音を聞いてやってきた者や、壁によって立往生を喰らっていた者も居たに違いない。

そうなれば千崎の背後にも同様に人が居るだろう。そちらは壁も無く、野次馬もいれば救急車も既に呼ばれているかも知れない。千崎らの様子を見ている者もいると考えるのが自然だ。

「まあいいよ。多分、僕の仕事はこれで終わる」

前島はその場にしゃがむ。その途端に、彼の背後の黒壁が風を切るような音を立てて破裂した。

「冗談だろう……」

千崎も体勢を低く構え、燃え盛る右手を前に向けた。路上に起こる次の展開が、見えてしまったのだ。

前島を中心とした影が周囲に飛び散る。地面を走る細い影は宙を舞う黒の槍のもので、街のあらゆる遮光物に突き刺さっていく。

新たに呻くような声が聞こえ、路上に見えるガラスはいくつも割れた。立っていた通行人に黒槍が突き刺さり、停車していた車のいくつかは黒の針が生えたかのような姿に変わった。ビルからは割れたガラスが落ち、槍の刺さった人間の背後で顔を青くしている者達に降りそそいだ。

千崎が周囲を確認すると、事故を起こし爆発までした車が未だに炎上しており、その救出に駆け付けていたのである。若い男性が、肩に刺さった長い槍の痛みを転がっていた。無傷の通行人は千崎と前島に視線を向け、思考停止に陥ったのかまともに動いていなかった。

「冗談ではないよ。ほら、何人死んだと思う？」

前島は笑って立ちあがり、自分が引き起こした被害の様子を確認した。視線をぐるりと回し、足元の警官が槍に貫かれているのを見て、また淀みのない笑顔になった。

「これが魔法使いだね、千崎君。どうして僕らが彼らに頭を下げて媚びへつらわなければならぬのか、考える気にもならないよ。こんな弱い生き物なのに個体数だけはバカみたいに多くてさ。ふざけるなって言いたくなる」

「その意見を否定はしないが」
「だろう？ そう思うよね？」

前島に視線を戻した。彼が人間として社会に出ていないからといって、他人に無差別な被害を加えて平気な顔をしていることは千崎の腑に落ちなかった。人を殺してしまうということは、どう転んだとしても喜劇にはなりえない。

「お前はどうかやら、人間には向いていないらしい」
右手の炎が消えかかっていることに構わず、千崎は前島に向かって強く地面を蹴った。

「そうかもしれないね」

飛び出した勢いのまま、燃える手を振りかぶる。防ぐ様子も見せない前島の顎に、千崎は腰を入れた拳を叩きこんだ。骨のぶつかり合う音が、あまりにも軽かった。

前島は地面に転がるが、立つ意志は見られなかった。千崎が倒れる彼に近づくと、目を見開いて視線を合わせた。

「殺すのかい」

赤い唾を吐き出し、前島は言った。千崎が胸倉を掴むと、彼は大儀そつに首をごきりと鳴らした。

「誰に雇われた」

「殺すのかい？」

「質問に答える。お前が陽動なのは解ったが、何故お前は俺を知っている」

千崎が宮乃の依頼を受けてからまだ一時間ほどしか経っていない。

宮乃の状況を即座に掴めていない限り陽動の人間を頭数に入れてい
るとは考えにくいのだが、彼の突発的な行動は確かに人を寄せるも
のだった。

「何故って」

前島は首を忙しく左右に折りながら、静かに言った。

「四十八人も殺したんだから、知らないわけがない」

「……なるほど」

千崎は前島から手を離れた。これで少なくとも、宮乃の一件のみ
で彼が襲ってきたわけではないということは確実になった。

救急車のサイレンが近づいてくるのを聞き、千崎はその場から去
ることにした。ジーンズから携帯電話を取り出し、綿貫の番号を選
ぶ。前島が言う「仕事」がこの騒ぎなのだとしたら、さらに宮乃を
狙う魔法使いが既に動いているのだろう。

携帯電話を左手に持ち、コールを待った。

二回目のコールで、「どうした」とすぐに綿貫が電話口に出た。

「何か異常はないか」

「ない。そっちは？」

「俺を別の名前で知っている人間が一枚噛んでいるようだ」

「……そうか、ならとりあえずウチに來い。さっさと鴉を捕まえて、
この依頼を終わらせるぞ」

通話を切る。

「鴉か……」

綿貫がどういう意図でその言葉を言ったのかを考えると、宮乃の
依頼の解決方法を導き出すことができた。一応、筋の通らない話で
はない。

そのまま歩きながら、サイレンを鳴らせる救急車とすれ違つ。巨
大な釘爆弾が弾けたようなあの惨状だと、救急車一台では足りない
だろう。もつとも最初の事故の為に呼ばれたものなのかもしれない
が、どちらにしろ必要な仕事は果たせない。

そこでふと、千崎は思い出した。

もう一度綿貫に電話を掛ける。

「綿貫」

「なんだ？」

「すまん。必要以上に手は出していないが、予想以上に相手方が派手に暴れてしまった」

「……まあ、それはしょうがねえだろ」

「すまん」

「やったのがお前じゃないなら、謝る意味がわからん」

ジーンズのポケットに電話をぎこちなく戻す。普段は右の尻ポケットに入れていたが、左のポケットに入れていたと違和感があった。掌を見ると、右手の炎は消え、出血も収まりかけている。

「痛むな」

この手の治療費は自己負担になるだろう。

魔法というものは便利なようで不便だな、と千崎は思った。

5、謝罪とお願いを兼ねさせていただきます

千崎はマンションまで戻ってきた。途中パトカー数台とすれ違ったが、特に見咎められるということもなかった。マンションのエレベータで住人と乗り合わせ、右手の傷に視線を向けられると、とりあえず痛そうな顔を取り繕った。

綿貫の部屋の前まで来て、一応中で妙な事が起こっていないかを確認する。別の魔法使いが先に行動を起こしている可能性は否定できない。

耳をそばだてる。少なくともドア越しには異常が無さそうだった。そのままチャイムを押し、千崎は部屋に入った。

ドアを閉める直前に外を確認すると、一瞬だけ廊下に違和感を覚えた。神経質になっているためかともう一度廊下を覗くと、特におかしい部分は見当たらなかった。

「遅いぞ千崎、もう生中継やってる。思ったより酷いんだな」

居間までやってくると綿貫と宮乃はソファに揃って座っており、テーブルに置かれたノートパソコンを眺めていた。

宮乃は難しい顔で口を尖らせ、千崎に視線を向けさえしない。パソコンから流れる人の声やサイレンの音に嫌悪感を覚えているようだった。

「マスコミの足が速すぎないか。まだ三十分も経たないだろう」

「今朝の事件のすぐ近くの現場なんだからありえなくはないっつか、ありえてるんだよ、現実に」

「一体どんな魔法を使ったんだ」

「車とコネだろ。取材用の」

綿貫は力なく首を振りながらパソコンの画面を千崎に向け、ソファを立った。そして一度千崎を睨みつけると、隣の部屋に行ってしまった。

『 事故直前に爆弾のようなものが扱われたらしく、付近のコン

ビニ店員の情報では、二人の男が事件直前に口論をしていたとの情報が入りました。警察は彼らの足取りを中心に、今朝こちらで起きた殺人事件との関連性を踏まえた上での聞き込みを

千崎は床に座って流れてくるレポーターの声を聞くと、眉をひそめた。

「あいつは捕まっていないか。当然だろうな」

宮乃が肩をぴくりと揺らし、呟いた千崎に向いた。

「……逃げたんですね。千崎さんは大丈夫でしたか？」

「見逃しただけだ、だから俺にも大きな傷は無い。前島の方は今のうちに泳がせておけばまたこちらに行動を起こすと踏んだ。尋問でも良かったが、相手に余裕を与える方が早い」

千崎は淡々と言う。前島の、もしくは前島の雇い主の目的を絞るためには、そうするのがベターだった。

「そんな」

宮乃は納得できていないらしく、かくりと落胆するように俯いた。「逃げられたんじゃない、見逃すなんて……人が亡くなったんですよ、確認できているところで四人も。重症の方も居ます」

「残念だ。そちらは俺も止めようとは思ったが、止められなかった。千崎の言葉は事実ではある。前島が魔法を使い始めていたため、最悪でも現在ののような騒ぎにはさせたくなかった。しかし前島にはあまりにも魔法使いとしての自覚がなく、千崎は彼の取り得る行動を見極めることができなかった。警察に引つ張られていられる場合でもなく、彼を置いて去ることにした。」

「止めようと思ったならどうしてあの人を逃がしたんですか」

「言っただろう。泳がせると判断したからだ」

「こんな事件を起こす人ですよ、野放しにしたらまた何か大変なことをするに違いありません。千崎さんはこんなふうに、魔法で誰かが傷つくのを見て何も感じないんですか」

「胸は痛むが」

宮乃はまるで現場を直接見ていたかのように、暗い感情の混じっ

た低い声を出した。

「怒ったり、悲しんだりしないんですか。人が亡くなったり、傷ついたりしているのに、それを起こした張本人は逃げ回っているんですよ。こんなの理不尽だっと思わないんですか」

「起きてしまったことは仕方がない」

「起きてしまったから今以上の被害を出したくないとは思わないんですか。魔法は人間を傷つけるために存在しているわけじゃないんです」

「そうとは言い切れない」

「だったらなんなんですか。人を傷つけるのは魔法使いとして当然だっけ言いたいんですか。そんなわけないじゃないですか」

「急にどうしたんだ、対応に疲れる」

千崎は右手を握った。

「そもそもこの騒ぎが起きた原因は、魔法使いである君のせいじゃないか」

宮乃は黙って顔を上げ、潤んだ瞳で千崎の目を見た。

「と言えば、少しは黙ってもらえるのか」

「……私に責任があるなら、私があの人を捕まえます」

「そんなことを言いたいわけじゃない」

千崎は溜め息をつく。一方で宮乃は、息を無理に止めているように見えた。

「君の憤りは理解できるが。君自身、その気持ちを俺にぶつけたところで意味がないことはわかっていているだろう。今の感情に君はただ、何かしらの主体性を持たせようとしているだけだ」

彼女は首を左右に振った。

「私は杖を持っているんですよ。あの場であの人を止める手立てだっけあつたはずなのに。私が杖をすぐに手放しさえしていればこんなことには」

「俺が前島を即座に殴り殺していれば、こんなことにはならなかった」

宮乃の言葉に被せて言うと、彼女が震えるようにびくついたので、うかがえた。

「……そんな言い方は」

「そんな言い方をすれば、どちらもある意味では事実だと言えるかもしれない。しかし、その責任はどちらにもない。人を殺した責任を負うのは、殺す意志を持った者だけでいい」

「殺す意志？」

「世の中で殺人なんて罪を犯す人間には、望んで他人を殺している場合が全てではない。ミルグラムの例とも違うが、殺人にも様々なケースはある」

「確かにそうかもしれないけど、そんなの詭弁です」

「話半分に聞いてくれればいい」

「……………」

宮乃の手に力が入っている。握った拳は膝に押し付けられていた。「……千崎さん。あたしは魔法使いだから、魔法をああして使うは許せないですよ。こんな大勢の人間を巻き込むようなことする人には、そんな理由があるとは思えません」

「確かにそうだが」

宮乃はしっかりとした声で続ける。

「それに、あの人を止めようって考える気持ちは人間として当然のことです。人が他人の命に手をかけるなんて、簡単なことじゃありません」

「そう思うのか」

「誰だってそうです」

そのまま千崎は彼女の次の言葉を待とうと思ったが、ちょうど救急箱を持って居間に現れた綿貫と視線が衝突した。綿貫の指には普段滅多に使われないような、妙に大きい絆創膏が摘ままれていた。

「おい千崎、手洗って来い」

綿貫はキッチンで手を洗った千崎にソファに座るよう言いつけた。

そして千崎の右手をもぎ取るように引つ張り、抉れた手のひらへ市販の消毒液をふきかける。

「宮乃、こいつの言ったことは気にするな」

「どうしてですか」

綿貫が言つと、宮乃は首を傾げた。

「こいつがそれらしい事を抜かす時は、大抵別のことを考えているか全く何も考えてない。抽象的な言葉で茶を濁すことを覚えてるからな」

「じゃあ今のは全部、嘘なんですか」

「嘘つつーか、まともな言葉じゃない」

そんなことはない、と千崎は言おうと思つたが、やめた。消毒液の染み込みが神経に到達したのか、びりびりと痛みが走つたためだ。綿貫は痛みに歪んだ千崎の表情を無視して、すぐさま傷口にガーゼをあて液を吸い取つた。

「これは手当てになつていいのか、思つたよりも内側にくる」

「適当だよこんなもん。そもそも何で怪我してんだ」

「急いでいた。それにあまり集中もできなかった」

やっぱり馬鹿か、と綿貫は言つて手のひらの溝の上で大きな絆創膏を構える。困惑したような表情をし、ややあつてから傷にべたりと貼つた。そして、千崎の表情を伺つるように目を細める。

「……つーか、鴉はどうしたんだよ鴉は。悪いが巻き添え食らうのが免なんだ。さつさと捕まえて、この厄介事を運びそうながキとは縁を切りたい」

宮乃はむつとした顔で綿貫を見た。その反応を無視した綿貫には妙な白々しさがあつたが、千崎はただ頷く。

「その話を忘れていた」

首を捻つた宮乃が「なんですか」と訊いた。

「前島の言葉から察するに、彼はどうやら鴉と繋がっているようだ」
当然ながら千崎が鴉であるため、前島は鴉ではなく、千崎を鴉だと知っている人物と繋がっている。彼がその人物に雇われている

のなら、千崎を狙うのは不自然ではない。単独で動いていると考える必要もあるが、それでは事故を起こした理由に見当をつけにくくなる。

「……ってことは？」

綿貫は首を捻った。あくまで千崎に、確認を取ろうとしている。

「鴉は昨日魔法の杖の取引に加わっていた。奴は魔法の杖がセガミ側に渡っていないことを知ったため、現在はその回収に動いているようだ」

昨日の仕事。セガミ住宅グループの関係者に向けて、千崎、つまり鴉が運び屋となつて綿貫の杖を運んだ。名目上はそうなっている。相手が仲介として魔法使いを通したのかは不明だが、千崎が渡した直後までは仲介役であろう青年に魔法の杖が渡っていたことは確かだ。問題があるとすれば、その直後になる。

「前島のような魔法使いと共に、杖を奪った君を標的としてな」

千崎は宮乃に視線を合わせた。彼女は目を逸らさない。むしろ嘘をついた千崎の方が怯んでしまいそうな目だった。

「だったら、望むところです」

「……なんだって？」

訊ね直すと、宮乃は若干胸を張った。

「鴉に狙われているなら、あたしから彼らを潰しにいきます」

千崎は思わず綿貫に顔を向けた。すると中途半端にひきつった笑みになる。

「つーことは、なに……」

「相手があたしに向かつてくるんです、尻尾を見せたら喰らいついてやりましょう。依頼はあくまで『鴉を捕まえること』ですよ、千崎さん」

ソファを立った宮乃は決心したように拳を握った。

「そうか。君がそれでいいなら、俺もそのつもりで構えよう」

宮乃の姿を受けて千崎は頷く。彼女が立ち向かうと言つのなら、そちらに目を向けさせればいい。たとえそれが嘘で形取られたもの

でも、金を貰ってしまった以上は依頼を済ませなければならぬ。
彼女の本来の目的を捻じ曲げるようになってしまっても、それは
仕方のないことだ。

『今朝の事件の続報が入りました』

ノートパソコンからは未だ事件の様子が囁かれ続けている。宮乃
がそこに反応するような素振りを見せたため、千崎と綿貫もアナウ
ンサーの声に耳を傾けた。

『被害者は運送業の二十一歳の男性、柿沢達也さんです。もう一人
は未だ身元不明、三十代男性遺体との報告です。二人の被害者と、
ビル街での事故との関連性も含め、警察は捜査を続けていく模様で
す』

スタジオにカメラは戻っており、その背後で流れていた事故現場
の映像もすぐに止まった。コメンテーターが「物騒だ」とか「事故
ではなく事件である」とか、根拠のない発言をいくつかこぼしてい
た。

「この報道、三日は長引きそうだ」

千崎は番組の様子を見て首を横に振った。魔法使いの起こした事
件は、いずれ適当な言葉と理由で処理される。組合が圧力などをか
けるまでもなく、不可解が認知されても証明はされない。そのたび
人間は整合性を立てるのが得意だと思う。

鴉の仕事はそれの繰り返しだ。認知的不協和を解消しようとする
人間の習性を利用して、誰かを殺害する。依頼と目標があるのみで、
鴉自身の意思すら介入しない。死んだ人間も、ほとんどが事故死と
して処理される。まるで人の意思が介入していないかのように。

「……やっぱり、駄目だったんだ」

ノートパソコンの画面をぼんやりと見つめる宮乃は、小さな声で
呟いた。

「やっぱりとは？」

「いえ……やっぱりあたしは、急いで鴉を捕まえなきゃいけないな、
って」

言葉とは裏腹で、決心したような調子には聞こえない。諦観のよ
うなものが混じった溜め息だった。

「そうだな」

彼女の事情はわからない。千崎が知ることは、おそらくない。単
なる依頼人に深入りはしない主義なのだ。自分が鴉であることにも、
深入りさせる気はない。

「よし、しょうがないから私も一肌脱いでやる」

綿貫は救急箱のフタをばたんと閉じ、眼鏡を支えながら言った。

「あてがあるのか」

「そんなもんはない。だが、あの前島って奴の顔は覚えてんだよ」

「ああ。なるほど」

千崎は彼女の自信ありげな様子に納得したが、不思議そうに二人
の様子を眺める宮乃は不服そうな声を出した。

「何かあるんですか？」

すると綿貫は表情を異様に柔らかなものにして、

「何ってお前、最初にここに来た理由は何だ」

「真理の目が欲しいって話ですけど……あつ」

「そうだ、と言って宮乃の頭を掴んだ。」

「視てやるよ。一回だけな」

二人は目を合わせ、宮乃は頭を掴まれたまま首を捻った。

「えっ。だったら最初から視てくださ……うあつ、いったいです、
頭潰さないでください」

「マジで疲れるんだよ。こっちの労力との兼ね合いでちょっとサー
ビスしてやるってだけだ。それに私は鴉の手掛かりを持ってなかつ
たし、そういうのは時間も死ぬほどかかるんだよ」

「あ……そうなんですか……ありがとうございます……」

そして綿貫は立ちあがって、隣室に救急箱を持って行ってしまっ
た。ばたんとその部屋のドアが閉まり、がさごそと探しものを始め
たようだ。

「あの、千崎さん？」

その音を見計らったように宮乃が口を開く。

「どうした」

「一応訊きますけど、千崎さんはこの所員さんではないんですね？ 依頼も別に受ける、っていうような話をしていましたし」

「ああ。普段はただのフリーターだ」

「なら、なんで綿貫さんは手助けをしてくれるんですか？」

ぴたりと千崎の動きが止まる。

「……言われてみると、俺にもよくわからないな」

実際のところ、綿貫はもう宮乃と関わる必要はない。逆に言えば無視する理由もないのだが、間違いなくそれは無駄な行動だ。無償で他人の為に動くほどの善人でないことは、千崎のよく知っていることである。

綿貫は、探偵として活動しているかと訊けば、していないこともない、という。魔法使いとして仕事をしているのかと訊けば、そこそこ、という。どちらにも傾いていない、事情も知らない傍から見れば一般人だろう。

魔法使いは大半が綿貫のように、普通の生活と魔法使いとしての生活の両立に成功しており、損得勘定によって魔法使いとして動く。言ってしまうえば、魔法使いとしての仕事が副業となる。基本的には人材派遣会社のような組織が魔法使いに声を掛け、リストを作成し仕事の紹介をする。もちろん正規の組織ではないため、確実性や安全性は保障されていない。そのため魔法使いが魔法使いとして活動をしなくても、生活さえできていればそもそも魔法使いである必要がない、ということも少なくないのが現実だ。

それでも彼女は魔法使いとして動いている。リスクに応じた金が払われ、私腹を肥やすことが可能であるからだ。千崎は思っていた。魔法使組合はそのような魔法使いについても、他の魔法使いにもほぼ関知しておらず、国内の魔法使いに医療機関を通した指定番号を付属させるのみで、沈黙を決め込んでいる。

「そうですか、でも確かにそういう感じですよ、千崎さんたちは」

宮乃はむつと口を尖らせて、勝手に一人で頷いた。

「どういう意味で言っているかはわかりかねるが、納得したならいい」

「ですね。あんまり変なこと言うのもマナー違反かもしれません」

会話もすぐに切れ、それほど経たないうちに隣室から綿貫がまた現れた。今度は手に絵の描かれたような紙を数枚持っており、机の上にあるプリンタの元に立って二人を見た。

「集中するから部屋出てけ。印刷終わったら呼ぶ」

「何をするんだ」

「前島の足取りをこの辺の地図に出力する。あいつの顔面をあの場合から追えばいいんだよ、単純だろ」

「単純なのか」

「単純だよ。ほら出てけ」

綿貫は蚊でも払うように手を振った。

千崎は嫌々ながら、宮乃を連れて部屋の外に出た。マンションの廊下に締め出されるといっなのは妙に子供じみているような気がして、宮乃と目を合わせた。

すると何故か彼女の瞳はニュースを聞いていた時とは打って変わって、輝きを取り戻していた。

「安心しました」

「そうか」

「はい。綿貫さんならきつと、すぐに鴉の尻尾を掴んでくれますね」「そうだといいな」

千崎は思わず空返事で返した。すぐ側で鴉の尾がぶら下がっているも同然の状況が滑稽に見え、このままいつまで嘘をつき通せるのかという疑念も浮かびあがった。

千崎は、宮乃からの依頼を終わらせる最良の手段を、鴉をまつりあげそのまま処分することだと考えていた。今の状況では前島を雇った人間がそれにあたり、そうなるように話を進めているつもりだ。

宮乃の様子から鴉の顔を知っていないようなので、適当な理由をつけて鴉なのだと言わせたい。ほとんどの人間が鴉について知らないのだから、その誰かが鴉でないという証明はできない。しかし問題は、その逆も宮乃に証明できないことにある。

「こうして追い出されるのって、叱られた子供みたいですね」

一方で宮乃は、気の抜けた足取りでふらりと廊下の手すりに体をもたれると、六階から地面を見降ろした。

「丁度俺もそう思っていたところだ」

「きょうだいつばいかもしれません。お姉ちゃんに怒られて、って。千崎さんのさっきの変なお芝居の時みたいな」

「あれは変ではない。アルバイト中の俺は常にあんな調子だ」

「そうなんですか？ あんまりイメージ合いません」

軽く笑って宮乃は言った。出会って数時間の人間にイメージと言われても、いまいち千崎にはピンと来ない。

「……あたしは妹いるんですけど、お兄ちゃんとかお姉ちゃんってどんな感じなんでしょうね」

「妹から見た君の姿が、姉だろう」

「いやまあ、そうなんですけど。あたしが鏡で自分を見ても、そういうのわからないじゃないですか。姉の威厳とか、綿貫さん持っている感じつばいです」

「威厳か。俺には家族が居ないから、そういう感覚は想像のしようがないな」

六階の廊下となると、風はそれなりの強さになる。宮乃の髪が煽られ、特に抵抗もしなかったためにぐしゃぐしゃに乱れた。

「……そうなんですか？」

風が止んだ合間を縫って、呟くように宮乃は言った。

「……いや。兄弟はもともといない、両親は既に他界している、だつたな」

「ああ。親が亡くなるのって、やっぱりそれくらいなんですな」

「俺は少し早いんじゃないか。まだ二十の前半だ」

「えっ？」

千崎の言葉に過剰に反応し、素早く宮乃は振り返ると髪を慌ただしく直し始めた。

「どうした」

「あ、すみません、失礼しました、というか千崎さんって若いんですね」

「老けて見えるのか」

「いやいや、立ち振る舞い？　っていうのがけっこうきっぱりしてるんで、もっと落ち着いた年齢なのかなって。夏服ってその、年齢とかあんまりわからないじゃないですか、見た目は若いですよ、大丈夫です」

「大丈夫……」

年齢を気にしていたわけではないが、変な調子で答えられるとシヨックを受ける。さらに彼女の興味深げに観察する目が千崎の皮膚をなぞっているようで、むずかゆい気分になった。

「ちなみに、いくつだと思ってた」

「それは……別に良いじゃないですか」

頬を搔いてわざとらしくはぐらかそうとするが、その頬は恥ずかしげに赤くなっている。

「そんな態度を取られると落ち込むな」

「悪気はないんです、ごめんなさい……うつん……」

宮乃は言葉を探したいのか、乱れていた前髪を摘まんで、あつちこつちに彷徨わせると、

「あ、綿貫さんの魔法ってどんな感じなんですか？」

急な方向転換が始まったが千崎は取り合うことにした。

「良くはわからないな。魔法なんてものは、人によって全く違う観念だろう」

「ですね」

話題を変えられたことが嬉しかったのか、若干大きめの声で返事が返ってくる。

「そもそも綿貫の魔法は概要を説明することすら難しいんじゃないか」

「そうなんですか？ 見たいものを見られる、って話を聞いていたんですけど」

「俺も少しは聞いているが、すげえ視える、としか言わない。綿貫自身、あれをはつきり説明できるのかすら不明だ」

綿貫の魔法は利用者や依頼者に『真理の目』と呼ばれることがあるが、それこそが真理であるかは千崎にはわからない。魔法使いの観測する現象言語というものは概念的で、魔法使いはそれを言葉や何らかのかたちで表現することは基本的には不可能なためだ。結果として魔法使いの操る魔法は、現象言語という概念が外部に認識されず、魔法による変化のみが現れることとなっている。

ありのままを話すと、宮乃は難しそうな顔で腕を組んだ。

「すげえみえる……そうですか……」

「とにかくだ。すげえ視える綿貫が手を貸してくれるのなら、わざわざあちらがまた動いてくるのを待たなくていい。だからこちらから接触することになるが、君はどうする」

「どうするって？」

本当に不思議そうな顔で宮乃は目を丸くした。

「前島の様子だと、鴉はろくでもない魔法使いを複数雇っている可能性がある。依頼を達成するにあたって君を危険な目に遭わせる必要はないんだが、君は鴉を直接探す気もあつたようだった」

「鴉に直接会う意志があるかってことですか」

「そうなるな」

「ありますよ。あるに決まっています」

即答だった。

「なら、綿貫の手掛かり次第ですぐに前島を追うことにしよう。……もう少し時間を掛けられれば、こんな行き当たりで彼らを追うことはしないんだが」

「大丈夫です。あたしにも時間がありませんから」

「なるほど」

千崎は適当に頷いた。時間が無いと言えるのなら、彼女自身も覚悟を持って杖を握り、鴉を追うつもりなのだろう。ならば千崎も手を尽くすことに必然性が持てる。少し熱が入り過ぎた、と言いつく作ることができる。

「そういうことなら、俺も尽力する」

そこでドアが開いた。綿貫の部屋だ。

「待たせたな。入れ」

宮乃は顔を出した綿貫に軽く頭を下げて、さっさと部屋に入ってしまった。千崎も開いたままのドアを掴み、中に入る。

そのまま後ろ手に閉めようとした。

だが、ドアは閉じなかった。

「……………誰だ？」

千崎が足元を見ると、ドアには小さな足が挟まっていた。

足から視線をあげると、隙間からは小さな顔が覗いていた。

「ごめんなさい」

白い手がその隙間から伸びた。夏だというのに腕は日焼けもしていなかった。手にはざらりと銀のリボルバーが握られ、砲身は千崎の方を向いていた。

「ごめんなさい」

ドア越しの声は男女どちらのものかはわからない。性差の見られない年齢の子供の声であることはわかるが、それ以外は。

「ごめんなさい、お願いだから、死んでください」

三度目の謝罪の声を合図にして、引き金に掛けられた指にくつと力がこもった。撃鉄は既に起きていた。

直後にがうんと吼えるような音が鳴った。

一切の迷いなく、彼あるいは彼女は千崎へ銃弾を発射した。

6、寡廉鮮恥と

火薬の匂いが鼻をくすぐった。

銃弾は千崎の頬をかすめ、奥の廊下の天井にめり込んだ。

千崎はドアを蹴り開け、すぐさま銃の持ち主に跳びかかる。相手がTシャツと短パンを着たどこにでも居るような少年だったことが、その一瞬で確認できた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

仰向けに倒した少年の上に乗りあげ、足で足を、体重をかけた腕で相手の胸と手を、力づくで押さえつける。少年のリボルバーは古いタイプのシングルアクション式だと確認できたため、銃口を下に傾け、さらに撃鉄を起こせないようシリンダーとともに握りこんだ。

「ごめんなさい」
だがふと気付くと、千崎のこめかみに硬い感触が押しつけられていた。

千崎はすぐ下に居るはずの少年を見る。

「ごめんなさい」

誰も居ない。居るのは真横に立つ少年だけで、千崎はマンションの廊下に膝と腕をついたまま、少年に銃を突きつけられていた。

「これは……」

「千崎！」

綿貫の声が開け放たれた部屋の方から聞こえた。近くに居るのは耳でわかったが、千崎はドアを背にしている状況は見えなかった。銃口がすぐそこにある手前、振り返るのは難しい。

「ごめんなさい」

撃鉄をかちりと起こす音が耳に入ってきた。千崎は少し考えたが、先に体を動かすことにした。

「なぜ謝る」

眩いて、千崎は目を閉じる。

あとは彼が引き金を引けば千崎の命は終わる。回転する銃弾で頭を穿たれ、意識が消える。しかしそんなことを認められるのかといえば、千崎は否と答えるほかない。銃弾よりも早く、彼の引き金にかかる指よりも早く、少年の脳が身体へと指令を出すよりも早く動くだけで、この命が消えることはないのだ。

「ここを掃除するひとに、あやまらなきゃいけないから」

少年は呟き、リボルバーが吼える。しかし発射された弾は少年の真上、天井へと刺さった。

「安心してくれ。その必要はない」

「あれ？」

少年は心底不思議そうな声を出した。千崎に握られた彼の腕は上を向いていた。肘と手首の間に関節が増えたかのように垂直に折れ曲がっており、リボルバーは小さな煙をあげている。

千崎は直前に思考した。自分の体を動かすイメージによって魔法を履行したのだ。自分の頭を銃で撃ち抜かれるビジョンよりも、自分が彼の腕をへし折るイメージを優先し、行動を通じて具現させた。体を介した魔法ではあるが神経を通じたものではなく、脳内処理の時点で身体を動かしているために、結果として少年の決断、行動よりもごく僅かに早かった。

「なんで……なんで、なんで、なんで」

駄々をこねるように少年は繰り返す。彼は折れた右腕から即座に銃を取り、震える左手で銃を構えなおした。顔と目を一瞬で真っ赤に染め、正常とはいえない小刻みな呼吸を繰り返して。

「なんでだよ、なんで！」

少年は叫んだ。銃声の何倍も小さい悲鳴だった。

だが、千崎は止まらずに動く。平常心を失った相手には魔法なんてものは必要ない。掴んだままの右腕を、折れた状態から矯正するように無理矢理引っ張った。苦痛に目を白黒させ、左手に銃を持っていることを忘れたのか右腕をかばおうとした。当然銃口は横を向

く。千崎は無力になった左腕を少年の胸に押し付け、マンションの壁に小さな体ごと叩きつけた。

うつ、と小さな声が吐きだされ、少年は首をかくりと下に向けた。「綿貫、これは」

千崎は言った。綿貫は玄関に立って苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「一旦ウチに入れる。今の騒ぎは少しまずい」

「だが、彼は……」

おそらく自分だけを目的としている。それを言ってしまうそうになり、言葉が止まる。今の状況ではそれを口に出す訳にもいかない。

「いいから入れ。一般人に直接見られてないだけマシだ」

「ああ」

千崎はぐったりした少年を背負い、綿貫の部屋に戻った。目を丸くさせる宮乃とすれ違ったが、彼女は口を開く様子はなかった。

綿貫は少年の腕の応急処置に、添え木代わりに物干し竿を包帯ごと括りつけた。体はベルトとゴムテープで拘束し、身動きが取れないようにした。拳銃は千崎が持つことになり、残っていた六発の弾は抜いておいた。

少年の拘束を完全に終えるまで宮乃は黙っていた。千崎と綿貫の行動をどう判断したのかは見た目にはわからなかった。

「こんなガキまで使うってことは、相手方も下種だな」

デスクチェアにくったりした少年を座らせ、綿貫は腕を組んだ。

「たった六発の銃弾で襲わせるとは」

千崎は少年を眺めながら、この対処をどうするべきかを考えた。この少年をただの捨て駒として利用しているのなら、杖を奪いに来た人間だと宮乃に対して整合性をつけられない。

「この子、どうして……」

少年を見つめたまま宮乃は呟いた。

「これが鴉のやり方なのかもしれない」

千崎が応えると、彼女は首を横に振った。

「どう見たってまだ小学生じゃないですか。それなのに、どうしてこんな酷いことを」

「悪いが君の常識に構ってはられない。この少年の行動で、俺たちはすぐに動くことを余儀なくされた。不審な発砲音と叫び声を聞いて無視してられる人間はそれほど多くないはずだ。君には時間が無いんだろう？」

「そうかもしれませんが……」

宮乃が言い淀んでいるうちに、千崎は綿貫へ視線を向ける。すると綿貫は頷き、プリンタの上に重ねた紙を手を取った。

「地図に一応、前島の足取りを途中まで引いた。すぐに出るよな？」

千崎に地図が渡される。地図は上那市のもので、道路上に赤いマーカーが走っていた。廃ビル付近から一直線で遠くまで離れ、そこから道に迷ったように何度か右や左に折れて、終点に到達していた。

「距離があるようだが、車で移動しているのか」

「だろうな。で、見えたのがそこまでだ」

マーカーの終点は上那市の繁華街にある。

「随分余裕があるらしいな」

「余裕は知らん。その辺でちんたら動いてるんなら、尾行切ろうとしてんのか誰かとの待ち合わせ場所でも探してんのか。さすがに何も考えてないってことはないだろう」

「こちらの移動は」

「私の車を貸してやる。もちろん後でレンタル料取る」

綿貫はスーツのポケットからキーを取り出し、千崎に投げ渡した。

「だったらお前が運転すればいい」

受けとった千崎が顔をしかめて言うと、綿貫は気絶したままの少年に指をさす。

「このガキを放っておくわけにもいかねえだろうが。目を覚ましてからまともに会話できるかもしれないし、何かあれば連絡する」

「子供は病院に預けたほうがいいんじゃないか、ここに長居をさせ

ても得はない」

「連れ回すのも荷物になるだけだろ、こっちは私に任せとけ」

「そうか」

千崎は宮乃に視線を移した。宮乃は少年を見つめたまま絶句していたが、千崎に気付くとすぐに我にかえって口を開いた。

「……なら、すぐに行きましょう。あたし、早く鴉に会わないと」
「そうだな。それがいい」

受け取ったキーを握り直し、千崎は玄関へと歩きだした。宮乃は床に置いていた学生鞆を背負いなおすと、足早にその後ろについた。その様子を見て千崎は、実直に自分の目的を果たす姿勢に、彼女の魔法使いらしさを感じた。

宮乃から先に玄関の外へ出させると、千崎はふと居間の方をもう一度見た。

少年が未だ気を失っているのが部屋の奥に確認できる。

彼を気絶させる直前、掴んだはずの体が移動するという説明不能の不可解が発生したところ、彼が魔法使いであることは間違いないかった。少年がマンションの廊下に居た段階では襲ってこなかったため、千崎のみを狙っていることも正しいと考えられる。しかし千崎が命を狙われるとなると、鴉であることを知っている以外には考えにくい。汚い仕事は千崎でなく、鴉が行っているためだ。

鴉は基本的に、自身の素性が割れていないという前提で話をする。殺しの依頼は「鴉」が遂行しており、フリーター兼魔法使いの「千崎」は何も関与していないという建前だ。昨日の杖の配達は「綿貫の使い」が行ったもので、当然「鴉」が行ったものではない。だが、昨日の取引に「鴉」が関与していたことは宮乃にも割れてしまっている。それがどういふことなのかを考えると、何らかの理由で鴉と千崎の情報が交錯している以外にありえない。

では何故情報が混ざりあっているのか。それについて少し考える
と、一つの疑念が湧きあがった。

千崎は靴を履かずに、居間に戻った。

「少しいいか」

綿貫はソファに座ったまま携帯電話を開いていた。

「どうした？」

「一応訊いておくが、昨日セガミに俺の事を伝えたか」

「私の使いを送りますとしか言っていない。なんだ、また私を疑う気になったのか？」

「俺の立場上な」

千崎が抑揚なく言うと、綿貫は頭を抱えた。

「そういう質問、これで何回目だ……」

「おそらく二十は越えているな」

「その中で私がお前に不利益を被らせたことは」

「一度もないな」

「だったら少しは信用しろつつの、馬鹿」

「それは悪かった」

ぱたんと携帯を閉じて、ソファにもたれながら綿貫は腕を組んだ。
「……っーか、お前がやってることってのは結構簡単に漏れるって前にも話しただろ。自分が今まで何件依頼をこなしてきてんのか忘れたのかよ。まともな社会じゃ誰かが一言情報漏らせば、縦にも横にも枝葉をつけて勝手に拡散していく。七十五日で消える噂なんてもんはないし、現代なら尚更、虚実を問わずに全部情報として管理できるようになってんだから。仕組みがそうなっちまつてる以上、こっちもそれを見越して対応するしかねえの。わかったか？」

「迷惑な話だな」

「自業自得だろ。疑り深いわりに全然的外れなことばっか言いやがって、いちいち睨まれるこっちの身にもなれつつの」

「水に流してくれ、俺も忘れよう」

「お前は気にしろ」

玄関口では宮乃が千崎を急かすように呼んでいた。

千崎も応じて、玄関のほうへと振りむいた。

「……痛い、腕」

しかし視線が玄関へと向く前に、千崎の動きは止まった。
「痛かった」

失神していた少年は首をもたげ、焦点の合わない瞳を千崎へ向けていた。まるで腹を空かせて狂いはじめた動物のようだ、と千崎は思った。

「……痛い！ 痛い！」

甲高い声で少年は叫んだ。縛られた体を椅子の上で揺らし、痛みを訴えているというよりもただ怒りに震えていた。千崎は少年から顔を背け、綿貫に目配せをした。

「落ち着いて」

綿貫は少年に近付くと、目線を合わせて穏やかな声を出した。幼児をあやすようなものだったが、少年は綿貫に興味を向けたようだった。

そのうちに宮乃は目を丸くして部屋に戻ってきており、少年の様子を観察するように眺めはじめた。

「君、名前は？ 私は」

「ヨコヤ、ヨコヤケンジ。知ってるはずだよその男は。ヨコヤって名前、知ってるよ、知ってるだろ？」

綿貫の言葉を遮って、少年は息を吸う。

「知ってるだろ！」

小さな体が跳ね、椅子にうつ伏せに倒れた。そのまま千崎の足元に転がり、顔を重そうに持ち上げた。千崎は一瞬返事に窮したが、首を横に振った。実際のところ、ヨコヤという名前を千崎は知らなかった。

「嘘だ、知ってる。だってお前が、お前が知らないはずない、知ってるって言え、知らないなんて言うな！ 忘れたなんて言うな！」

頭を木槌のようにフローリングにぶつけ、その度に少年は喚いた。
「ケンジ君、待って、深呼吸して」

暴れる少年の肩に綿貫は触れようとするが、その動きは止まらなかった。

「お前が！ お前が！ お前が！」

何度も床に頭を打ち付ける。千崎はその姿を黙って見つめていると、彼の額が割れたのが見えた。肌の亀裂から血が飛び、フローリングの上にはばたばたと叩かれる音がした。

「待って！ そんなことしちゃダメ！」

千崎の背後に居た宮乃が飛び出した。縛られた少年の体を無理矢理に抱きしめ、突発的なその行為を止めた。それでも少年は歯を食いしばったまま、獣のような唸り声をあげ続けた。

「い、やだ！」

少年は吠える。宮乃はそこで、短い悲鳴をあげた。

少年は拘束から逃れた。物理的に動けないはずの体が、その場から突拍子もなく消失したのだ。

縛られていた包帯やベルト、ガムテープも少年の抜け殻のようにすっぽりと抜け、宮乃の空振りした腕に絡まった。宮乃自身は転がった物干し竿でバランスを崩し、血の垂れた床に手をついた。

「これって、魔法……」

「さっきの彼を見ていなかったのか。彼はどうやら、テレポートのようなことができる」

千崎は眩きながら、倒れた宮乃を起こした。同時に部屋の様子を素早く確認するも少年の姿はない。

「どこに消えた」

「わからん」

綿貫は落ち着いた様子で隣の部屋を確かめるが、すぐに誰もいないと手を振った。千崎も居間に変化がないか再度見渡しても、彼の流した血以外に変化は無さそうに見えた。

「銃が見当たりません……」

宮乃は焦っているようだった。手の平が赤く染まっていたが、それよりも少年を気にかけている。

「とにかく彼を落ち着かせないといけません、ああいう状態の子は、危ないです」

「待て宮乃」

千崎は玄関に走ろうとした宮乃の腕を掴んだ。

「玄関は俺が開ける」

少年が銃を持っていったということは攻撃をする意思があるのだ。瞬間移動のような魔法が使えるのなら、銃弾が入っていないにせよ宮乃をただ行かせることは危険だった。彼女を守る義務はないが、彼には依頼を受けた義理がある。

「でもあの子は千崎さんを見て錯乱しているじゃないですか。これ以上刺激させたらもっと大変なことになります」

早口でまくしたて、宮乃は玄関に向かおうとする。それも千崎を引つ張つてゆきかねないほどに、彼女の腕には力が入っていた。

「大丈夫だ、銃に弾は入っていない」

「そうじゃなくて！」

宮乃は大声を出して千崎を振り払った。

千崎が目丸くすると、宮乃は慌てた様子で首を横に振った。

「……えっと、いや、あたしも子供だから、ついカツとなっちゃう気持ちがあるんです。千崎さんを見てあの子があんな風になるんなら、千崎さんが止めようとしても同じことの繰り返しになる、と思います」

「わざわざ君が危険な目に遭う必要はない。俺はあの少年を黙らせ、さっさと病院へ送ることにする。綿貫、宮乃を頼む」

千崎は無言を言わせぬよう宮乃を居間の方に引つ張った。抗弁しようとする彼女を無視して、千崎は早足で玄関に歩いていく。そしてすぐそこに少年が居ることを祈りながら、ドアノブに手を掛けた。

「殺してやる」

ドアのすぐ外に彼は居た。

千崎は後ろ手にドアを閉め、少年と向き合った。少年は左手に持った銃を千崎の顔に向け、今にも泣きだしそうな表情で銃を構えていた。

「悪いが俺は、本当に君を知らない」

かしん。

問答無用で撃鉄が降りた。だが銃弾は、当然入っていない。

「殺さないと、殺してやらないと」

少年は撃鉄を歯で起こし、また引き金に力を込めた。

「君がどうして俺を狙うのか、聞かせて欲しい」

かしん。

「なんで死なないの」

かしん。かしん。かしん。と、同じ行動を三度繰り返した少年は、

瞳に涙を湛えた。

「これでも、なんで死なないんだよ」

かしん。

「鴉のせいか」

六度目の同じ音を聞いて、少年は絶望的な表情を見せた。

「ヨコヤケンジ君。その銃の弾はもう抜いてあるんだ、何度引き金を引いても俺は殺せない。だから少し、君の事を話してくれる気にはならないか」

少年は膝をつき、人形のようにがくりとうなだれた。額の血が涙と混ざり、頬をつたって紅色に零れだした。

「じゃあ足りないよ」

「足りない？」

少年はリボルバーを手ごと口に突っ込み、胃液を吐きだした。その中には濡れた小さな袋が混ざっており、袋についた細い糸が少年の喉の奥から出てきていた。

直後の彼の行動は早かった。

銃を持った手で袋をつまみ、歯でピンク色の外装を破った。そこから出てきたものは細長い筒の形状をした金属のようなもので、先程千崎が抜いたりボルバーの銃弾であることがわかった。すかさずかしゅんと銃を振り、マガジン部分を露出させる。彼はマガジンに空いた穴に啜えた銃弾を挿しこみ、一発分の装填をした。

「お前の分が、足りない」

せき込みながらも、彼はまばたきをせず、千崎を見つめる。そして撃鉄を口で起こし、自分のこめかみに銃口をあてた。

「ねえ」

深く息を吸って、少年は苦しげに目を細めた。

「お前なんていなければいいのに、って、お前なんかいないのにな、って、お前なんて死ねばいいのにな、って、なんでお前は生きてるんだ、って、みんな思ってるんだ。そう見せないけどそう思ってる、そうにきまってる、だからみんな、目の色を変えるんだ」

「そうかもしれないな」

「でもそうじゃないから、お母さんは怒ったんだよね」

少年は千崎の言葉を聞くと、ひきつった笑みを作り、目だけを千崎から背けた。彼の表情は自然で、まるでいたずらを見つけられた無邪気な子供のものだった。

「ちゃんとできなくて、ごめんなさい」

殺意のかけらもない、ただの。

7、お財布との兼ね合い

千崎は車の助手席で地図を開いた。前島の引き起こした事件の現場はまだ騒然としているようで、千崎らは別の経路から迂回して前島の足取りを追うことになった。そこから軌道修正をするため、千崎は地図に示されたマーカーの上を指でなぞる。

「次の信号を左だ」

運転席からは返事が戻らなかったが、ウインカーがあがった。

「千崎さん」

代わりに宮乃の声が千崎の後頭部にかかった。

「あの子、どこに行っただんですか？」

「わからないな。彼が顔を見せることはもうないだろうが、それ以上は何とも言えない」

ヨコヤケンジは姿を消した。千崎が拳銃を奪おうと腕を掴んだところで、彼の姿はまたも消失した。突発的な物理的消失を彼が引き起こした現象だと捉えるなら、ヨコヤケンジは間違いなく魔法使いだった。

自決用と殺害用の銃弾を与えられ、千崎を殺しに来た魔法使いの少年。彼の目的は間違いなく一つに絞られ、宮乃の『魔法の杖』を狙っている様子は微塵も見せていなかった。もともと最初から、千崎の情報しか持っていなかったのかもしれない。

だとしたら彼はやはり、鴉を殺しにやってきたのだ。千崎はそれを思いながら、地図の上に視線を滑らせた。

「やっぱり鴉があの子を使っただんでしょっか……」

「そうでない俺が狙われる理由はない」

「確かにそう、ですよね？」

宮乃の語尾が不自然に上がり、千崎は小さな溜め息をついた。

「俺は一度もあそこまで人に恨まれるような依頼を受けたことがな

いんだ。あの少年の素振りだけでも、実際に受けるリスクが高すぎる
ことがわかるだろう」

「ですね」

即答した宮乃は、鼻から短い息を吐いた。

「今度は聞きわけがいいな」

「嘘つて、案外わかっちゃいますから。なんとなくですけど、千崎
さんは嘘つきではないと思うんです」

ふと千崎が顔をあげると、フロントガラス越しに学生服のグルー
プが横切っていくのが見えた。車は交差点の信号に引っ掛かってお
り、点滅する歩道信号に目をやると、右手側の道路にあるファスト
フード店が視界に入った。

「すまない綿貫、ここを右折だった」

「……やっぱ私が地図見ていいか？ レンタル代でゴネんなよ守銭
奴が」

「断る。それに守銭奴はお前だ、燃料代は払うんだから車くらい普
通に貸せ」

「あー、私が運転中で良かったなこの野郎」

綿貫は荒々しく頭を掻いた。前方の信号が青くなると、苛立たし
げな言葉とともに強くアクセルが踏まれた。

マーカー通りに市内を走ったが、前島の痕跡は見当たらない。繁
華街に向かうにつれて建物や駐車場の密度が上がっていくのみに、
人の様子に変わりはない。本当に前島に魔法の杖を奪う目的が
あるのか、と千崎の頭に疑問が生まれる程だった。後部座席の宮乃
はその間、文句や疑問を口に出すことなく、黙って学生鞆を抱えた
まま外の景色を眺めていた。

十数分ほど車に揺られた後、千崎は窓から周囲をぐるりと観察し
た。

「入るか？」

綿貫が千崎を見た。左手には大型デパートの立体駐車場がある。
地図のマーカーの終点はそこにあっただ。その出入り口前では、

赤色の誘導棒を振る警備員が怪訝な顔を向けてきていた。

「それでもいいが、お前には前島の動きがどう視えていたんだ。辿ってきた限りでは手がかりも何も」

千崎が質問をすると、綿貫は警備員に視線を向けて腕を組んだ。すると、ハンドルから手を離れたのを見た警備員は眉間に皺を寄せた。

「さっきの魔具、残留思念がどうのこうのってヤツで例えると、紫色の霧がこの辺まで移動して消えた」

「消えたというのは、つまり？」

「追ってた奴の感覚があのがキみたいに消えたんだよ。私の魔法の受容感覚を説明するのが面倒くせえんだが、視覚的には見えなくなった、嗅覚的には無臭になった、聴覚的には聞こえなくなったし、触覚的には触れなくなった。だから消えたって判断」

「なるほど」

前島が単独で動いているとは考えていない。千崎は、彼にヨコヤケンジのような魔法を使う協力者が居てもおかしくはないと思えた。ここまでの移動でその協力者を車で拾い、魔法を使って足取りを消したとなれば、綿貫が見失うのは仕方がない。

「だが何故それを出発前に言わなかった」

ヨコヤケンジが消え、千崎が部屋に戻った直後。既に綿貫は宮乃を落ち着かせ、家を出る準備を始めていた。それからここまでやってくるまで綿貫は特に何も言っていない。

一言くらいよこせ、というニュアンスで綿貫を見ると、不思議そうな顔が返ってきた。

「言ったとして、お前にできることは？ ちんたらやってると後ろの奴が駄々こねるぞ」

「それもそうか」

逃げた前島を追い、何処に雇われたのかを知る必要はある。宮乃の依頼のためではなく、「鴉」に暴力的な敵対をしようという相手は明確にしなければならない。

そうなる、もう少し人の手を借りたい。

と言おうとしたところで、運転席側の窓が叩かれた。

「あのね、通行の邪魔だから動いてくれない？」

綿貫が窓を開けると、警備員の中年男性が立っていた。

「すみません、後ろの連れが文句を言い始めて」と綿貫が応じると、

彼は不審そうに目を細め、後部座席の方にも首を伸ばした。

「いいから、入るの？ 入らないの？ 道路がこの車で詰まってるんだよ」

千崎は運転席側に顔を突き出した。

「入ります入ります。あと今日のことでお聞きしたいんですけど、

このあたりで不審な車を見ませんでしたか？ 親戚がこのあたりで迷っていたみたいで」

「不審車なんて、強いて言うならあんたらくらいだよ。ほら早く車動かして」

男性は所定の位置に戻り、車を睨みつけながら誘導棒を振った。

千崎が首を引く際にルームミラーをちらりと見ると、後方では数台の自動車が無言で列をなしていた。

上那市で最も大きな有越デパートは、平日でも人の足音が絶えることがない。夕暮れ時の今となると、食事に帰宅にとエスカレータを上り下りする流れが生まれていた。休日なら、のんびり歩いていると足をもつれさせるほどの激流に変わることもある。もっとも千崎の懐には基本的に余裕がないため、その流れにぶち当たることは数えるほどしかない。

日々の盛況はつまり企業の根源的な活力を示しており、有越は日本でも全国規模に店舗を展開され、くくりとしては大手に分類される。歴史はかなり古く、本店は百年単位で年表を作成できるほどの老舗でもある。

それだけの歴史を誇っている中で、裏で魔法使いを待らせているなどという話は一度も挙がったことはない。有越デパートはその系

列自体が元々巨大財閥の分派であるため、市場での競り合いこそが至上と捉えられているためだといわれているが、真実を知れる人間は数えるほどだ。

有越において魔法使いが要る場面がなかなか存在し得ないことは事実であるため、千崎を含む魔法使いが特にその動向について注視することはしない。魔法使いに需要がないなら、黙することしかできないのだ。

「要するにいらない」

綿貫は言った。上りのエスカレータに流されている間に、千崎が「腰を落ち着けよう」と軽食店に入ろうと提案したことがきっかけだった。

千崎の上の段で、女性二人は押し問答のようなやりとりを続ける。「でもお腹空いたんですってば」

「だから、余計なもんを腹に入れてたくないんだよ。食べたければ食べればいい、私を誘うな鬱陶しい」

「最後の晚餐かもしれませんよ」

「洒落のつもりなのかこいつ……」

「はあ。もういいです、わかりましたから」

先程から能天気な食事を薦める宮乃は諦めたように肩を落とす、

千崎へと振り返った。背負っている学生鞆が千崎の鼻先をかすめた。

「ダメです千崎さん、お話になりませんね」

「俺に振らないでくれ」

千崎は少し考えていた。前島を追うには明らかに情報が足りていない。これでは前島の依頼主を引きあげること、目の前の女子高生と手を切ることすらもできない。

だが、綿貫の事務所に居てはいらぬ被害が出てしまうことはヨコヤケンジの件により明らかであり、あの場に留まって杖の回収者、もしくは鴉への接触を図るものを待つことは厳しかった。

あのまま受けに回り、警察のような機関の世話になるというのは、魔法使いとしての信用に関わるのだ。

加害者としても勿論のこと、被害者としてもいただけない。魔法によって発生する事件の捜査は『こじつけ』という辻褃合わせにより解決されるものでなくてはならず、当事者に魔法使いが数えらるべきではないとされている。

もちろん魔法使いが魔法による殺人の被害者になることなど極めて不名誉なこと。たとえ少年であれ、拳銃を持っていたのであれ、傷つけられることですらすなわち不信の証となりえてしまう。

綿貫の部屋が魔法によって破壊でもされれば、綿貫自身が無事でも信用はくだけ散る。そうなれば、当然千崎にも仕事がまわらなくなる。

コンビニのアルバイトのみで生活していくには、少し厳しい。

「あそこにしましょう」

デパートの十階につくと宮乃は人の出入りが少ない店を指さした。現在は夕飯が求められる時間帯で、ランチが中心の軽食店は空いていた。

ウエイトレスに案内されて窓際の席につくと、宮乃は顔を隠すようにメニューを手に取った。

「どうします？」

「俺は少し電話をしてくる」

「私はトイレに行ってくる」

宮乃は同時に立ちあがった二人に目を丸くした。

「えっ、注文しておきますか？」

「必要ない」

千崎が今まさに必要としているのは食事ではない。すぐにテーブルから背を向け、携帯電話を開く。

「それ誰に掛けたんだよ」

「お前よりは安上がりな相手だ」

液晶を見つめながら綿貫へ返事をし、千崎は店先まで移動した。

登録している電話番号が通じることを祈りつつ、コールを数える。

三回鳴らし、もう一度かけ直す。

それが相手方のルールだった。

「はい、なんでしょ」

「……千崎だ」

二回目のコールであっさり若い男が出た。手慣れた、というよりもいいかげんに言うような軽い声だ。

「あれ。千崎さんってこの番号知ってましたっけ？ 送ったの別のやつだった気がするんですけど。まあそっちはもう繋がらないんですけどね」

「ルールはどうした」

「そんなのやめましたよ。クレーム多いんで。ていうかスルーですが、この番号知りませんよね、おかしいですよね」

「ところで今は忙しいのか、永井^{ながい}」

電話の相手は「言伝屋^{ことづかや}」と呼ばれる者だ。

言伝屋には、社会に住む魔法使いの観測と、その名簿の作成、名簿の管理、適当な仕事への一方的な派遣案内や企業への紹介などが仕事として挙げられる。『言伝』という名前とは違い、魔法使いの依頼者への斡旋を中心としている。

千崎が永井と呼んだ彼も、日本のどこにでもいる言伝屋の一人であり、どんな男なのかはわからない。男ですら、人間ですらないのかもしれない。もっとも、どんな相手であったとして、個人の益になるのだから何の問題もない。言伝屋はあくまで公にならない魔法使い関連の情報をマネージメントする立場であり、不動産を貫く魔法使組合に対するアンチ的な意味合いを持つ管理集団である。

「いや特には。いつも通りですかね。それでですけど、千崎さんの番号知りませんよね。これはいつもどおりじゃないです」

「綿貫から聞いた」

「ああ、そうですかあの人がっすか。いいですね」

永井は電話越しに一拍置いた。

「何かご用で？ あいにくですが、こっちからの紹介分はストック切らしてますよ」

「もともと尋ねられてからの紹介はしないだろう。そんなことのために電話をしたわけじゃない」

「ですね。千崎さんあたりに回すイイ仕事なんて滅多にございませんです。ていうかアナタは綿貫さんと組んでるんだから、それなりのおこぼれにあずかってますよね。隅に置けないというかセコいというか」

「そんな話はいい」

早口の永井を遮ると、ううむともった声が返ってくる。

千崎は顔をしかめ、改めて口を開いた。

「情報をよこせ」

「売ってくれ、ですね。あ、千崎さんには以前も売りましたっけ。

念のため言っときますけど、目的を言われないと厳しいかもしれませんよ。周知だと思っんですが、ウチら魔法使い同士での情報なんかはあんまり仲介しないんで、そのあたりはよろしくです」

「そうなのか。前に話した言伝屋はそんな話はしていなかったが」「いやいや、と慌てたように永井は言う。

「そりゃダメに決まってますよ……。例えば、エーさんに流した仕事で不利益を被った人が居て、エーさんを特定して報復しようとする輩が居るとしますよね、そんなこと考えてそうな人にはエーさんに関わりうることは教えませんよ。ウチは普通の人へアナタ達を斡旋するのが中心なんだし、その中でも腕のいい人を紹介するスタンズなんです。もし減らされたら困るに決まってるじゃないですか。市場に雑魚流しても消費者の信用失くすだけです」

千崎は話を聞きながら、カップル二人がつまらなそうにレストランへ入っていくのを眺める。

「電話口で話を聞くお前に、相手がどんな意図を持って情報を知ろうとするかわかるのか」

「いえ、もちろんわかりませんよ」

「なるほど。よく分かった」

そんな決まりが一応あるのだ、と千崎は内心で頷き、続けた。

「質問をしよう」

「いいでしょう、なんですか？」

「昨日、魔法の杖がセガミに売られたが、それを知っている可能性のある人間は特定できるか」

結局元を辿るなら、どうして宮乃が杖を奪いに来れたのかが問題になる。少なくとも千崎は誰に話が漏れているかを知らない。

「はあ。それはアナタ達二人と、セガミの運び屋さんだけじゃないですか？ 確か運び屋さんの方はセガミからこっちに要請がありましたよ。綿貫さん個人とセガミとのやりとりでしたから、それ以上はウチは本当にわかりませんね。ていうか綿貫さんにきけば済みますよね」

「俺はあいつを信用していない。運び屋の方の情報は」
すると、永井から返事が来なくなつた。

「永井」

「あ、すみません。そつからは金取りますからちよつと調べてました。聞きたいなら、一週間以内に五万払ってくださいね」

「大丈夫だ」

「そうですね。まあ、運び屋は大したことない人ですよ。軽運送業者の、柿原達也二十一歳ですね。ぶつちやけるとそうですね、千崎さんと似たような人ですよ。金髪で軽そうな」

「俺は金髪じゃない」

どこかで聞いた名前だ、と千崎は思った。

条件を考えれば、昨日アタツシケースを渡した金髪の男は柿原達也で間違いないことがわかる。もしも彼だけが魔法の杖が動くことを知っている第三者であれば、情報の漏れはそこから発生しているのかもしれない。

「柿原の最近の動きはわかるか」

「やっぱききますか。追加で五万ですよ」

「大丈夫だ」

電話の向こうでこそごとと動く音がする。

「……そうですね。彼は最近だと、あまりコツチの仕事はしてませんでした。大きい仕事もコネクションがないので回って来ていないでしょうから、生活カツカツだったかもしれませんが、こう考えると、千崎さんってやっぱりアレですよ」

文句を言いたくなかったが、「続ける」と千崎は言った。

「なので、セガミからの要請を彼に回したのは当然ながらウチですね。運送業ですし、まあ運ぶだけなら慣れてるでしょう」と

「取引されたのは魔法の杖だったんだが、大したことないという人間に運ばせるのは不自然じゃないか。言伝屋こそ杖の価値は理解しているはずだろう。万が一の場合があり得るとセガミに伝えていなかったのか」

「確かにその通りですね。ウチらも急遽柿原さんに話をする事になりましたから、そう思われるのは仕方ないですよ……ねえ」

若干勿体ぶつたような言い回しをし、永井は静かになった。

「……いくらだ」

「七万です」

「足元を見たな」

「さあ、本当なら十万だったかもしれないじゃないですか。いつときますけど、ウチらとしては答えなくても困りませんので」

頭の中で先払いの五十万から引き算を始めた。そういえば、依頼の達成ではいくもらえるのか話をしていない。払わないという話にはならないと信じたかったが、宮乃あさぎの人柄はよくわかっていない。

奥歯を噛み締めたい衝動を押し殺し、千崎は口を開いた。

「わかった。払おう。柿原へ急遽話をする事になった理由を、詳細に教えてくれ」

成果が得られないかもしれないが、もうすでに泥沼へ片足を突っ込んでいるのだ。

「はい。これは単純な話ですね。大分前からセガミへ紹介してた、まあ専属に近い形の魔法使いが、いきなり音信不通になったんです

よ。そういうの運び慣れてる人だったんですけどね、もう結構長い間スルーされてます」

「失踪したのか」

「いえ、そんなはずはないと思うんですけどね……。その人はウチら言伝屋と結構親しくできるポジションですから、よほどの事が無い限りは、ウチらを頼ってもらえればなんとかなるはずですし」

「そんな立場の人間がいるのか？ 聞いたことがないな」

「これは常識じゃないですか？ 魔具売りの人ですよ。言伝屋にはどんなものをさばいているか報告してもらおうようにしていますから。魔具の流れは、そのあたりの魔法使い界の近況を知るにはわかりやすい目安なんです。過剰に売られて一般人に魔法が浸透するとなると、無視もできませんし」

千崎は硬直し、永井の言葉を頭の中で繰り返した。

「魔具売りの活動範囲は」

「上那市周辺ですね。結構広いはずですから、ドコのナニまで、とは言い切れません。色々シマもあるみたいですからなんともいえませんが、まあウチらには知ったこっちゃありませんよ」

「なるほど」

その場で振り返り、喫茶店の方を見る。既に綿貫はテーブルに戻り、宮乃と何か話をしているようだ。テーブルの上には何も無い。注文を取り終わっているのかもしれない。あのテーブルに商品まで来てしまえば、長電話を理由に妙な追求をされかねないだろう。

「一旦切り上げたいんだが、少しいいか？」

「なんでしょ」

「その魔具売りの情報はどこまで開示できる」

またごそごそと物音を立てたのちに、永井は鼻で笑った。

「どこまで、つてのはそりゃあ……千崎さん次第ですよねえ」

8、もしかして：知るべきは謙讓の美德

綿貫がトイレから戻ると、宮乃は注文を終わらせていた。背負っていた学生鞆はファミリーレストランの時と同様に、彼女の隣に置かれていた。

「本当に何もいららないんですか？」と、綿貫に目を合わせるなり言った。

「いらない。千崎は？」

「まだ戻ってきてませんよ」

宮乃は入り口に指をさした。千崎は携帯電話を片手に棒立ちしている。言伝屋の手を借りるなら、まだ時間がかかるだろう。

「なら丁度いいな。お前に話があったんだ」

綿貫は席につくと、足を組んで改めるように言った。その様子を見つめていた宮乃は表情を固め、窓の外へと視線を逸らした。

「聞くだけでいい話ですか」

「今そんな話をするわけがねえだろ。馬鹿か？」

宮乃は綿貫の顔に目を戻す。綿貫は髪をかき上げ、目を細めた。

「お前は誰と繋がってる」

「……詮索は必要ないんじゃないですか」

無感情な声ですぐに返った。宮乃には動揺するような素振りはない。

「それは私の話じゃない」首を横に振り、綿貫は続ける。「私の知る所じゃ、その年齢でまともに仕事を回されている奴なんていない。質問に答える気がないなら、その魔法の杖を持って家に帰らせてもらうぞ。まさか私も、クライアントに急かされるとは思ってなかった」

そう言つと、宮乃の視線は学生鞆にちらりと移った。

「でもこの杖は」

「それは私の杖だ」

沈黙が降りた。宮乃は目を左右にくるくるさせ、僅かに俯いた。

「冗談ですよね？」

「嘘をつく理由はねえだろ。そもそも、最初からそれは私が取引に使ったものだと思ってたんだ。それがつい今、セガミから連絡が入った」

綿貫は頼杖をつき、頭を宮乃に近付ける。

「セガミの運び屋が殺され、杖の行方がわからなくなっている。金は予定通り払うから、明日までに杖を寄越してくれ、ってな。ついで手掛かりとして、その運び屋が殺されていた現場にもう一人魔法使いの死体があったと。これはお前と組んでいた奴か？」

片手で携帯電話を開き、綿貫は画面に映る二人の男性の顔写真を宮乃に向けた。

「柿原達也かきはら たつやと桐山鏡きりやま かがみ。どちらも魔法使いだが、桐山のほうは運び屋じゃないな。二人をやったのはお前なのか」

宮乃は答えず、顔写真も見ずに深く俯いた。綿貫はこれを肯定と取るか迷ったが、話を続けることにした。

「こつちもな、宮乃。殺人を咎めるつもりはさらさらねえんだよ。そんなことよりお前のやったことが、取引を妨害するためのものなのか、それとも魔法の杖が必要なのか、それは頼まれたことなのか、お前の独断でやっていることなのか。なんでもいいが、知らなきゃこつちも気が気じゃない。わかるか？」

「あたしは誰も殺してなんかいません。桐山さんと一緒に動いているだけです」

「それがどうした」

面喰らったように動きを止め、宮乃は目を丸くした。

「いえ……だから、あたしは誰とも繋がってない、と思います。あの、拘束力のある相手にとか、契約の関係でとか、そういう意味です」

それを聞き綿貫は、俯いている宮乃の頭を見つめた。

「お前と桐山との関係は？ そいつの上には誰がいた？」

宮乃は返事に時間を十分にかけて、やがて言った。

「桐山さんは私の叔父です。あの人には、あたしと妹の保護者になってもらっていました。魔法使いに関しての部分はあたしにもわかりません。桐山さんはそういうこと、あまりに口に出す人ではなかったのです」

「保護者か。両親は？」

「答えなければいけませんか」

「答えなければ無条件で杖を奪う。セガミの話は反故にしちまってもいいんだが、そいつを蹴ってまでお前に付き合ってもやる義理もないならな」

宮乃はあからさまに不機嫌になり、唇を噛んで綿貫を見た。

「綿貫さんって、何を考えているのか全然わかりませんね」

綿貫はわざとらしさを見せびらかすように、顔を隠すよう手をひらひらとかざした。

「付き合ってもやる義理なんて、あなたには最初から無いじゃありませんか」

「お前に付き合ってるわけじゃない」

「千崎さんですか」

「話を逸らすな。私が主導権を握ってることも理解できねえのか」
かざしていた手で、宮乃の傍らにある鞆を指す。

「……いいです。わかりました。話せるだけ話せばいいんですね。あたしの話なんて聞いても、どうせ何の足しにもなりませんから」

その時、「お待たせしました」とウエイトレスが盆を抱えて歩いてきた。盆から宮乃の手前にスパゲティのセットが置かれていく。全てを配置し終えたウエイトレスは綿貫に他の注文を訊ねたが、綿貫は手を振って対応した。

「腹の足しに？」

ウエイトレスが離れてから、綿貫は指をさして訊いた。宮乃は口を尖らせ、目の前のミートスパゲティを見つめた。

「冗談言うような剣幕じゃなかったのに……。じゃあ食べながらで

いいんですか？ さすがにあたしも失礼だと思っんですけど」

「お前の判断に任せる。背に腹は代えられないからな、そのサラダむさぼりながら馬鹿面で話そうが、私はたぶん怒らないから」

「そこまでお腹空いてるわけじゃないです。でも、いただきますね」
スプーンとフォークを手に取り、スパゲティを巻きはじめ。スプーンの上でぐるぐると、綿貫の顔色を伺いながら。

「だったら食ってるのスープが冷めるぞ」

宮乃はむっとした顔になり、巻き取ったスパゲティを食べた。もごもごと口を動かしながらも、やはり綿貫を警戒しているようだった。

綿貫はその目を見ながら、少し前のことを思い出した。

「そっぴやお前、あのガキのことは何も言わないな」

宮乃の口が止まった。すぐに思い出したように顎を動かし、水を飲んだ。

「言ってもあんまり意味がないと思ってますから」

綿貫は宮乃の言葉によって首を捻る。

「前島のニュースを見た時のお前は、そういう奴には見えなかったが」

すると宮乃は瞳を上に向け、頬を指で押した。感触を確かめるように何度か押し、口を開いた。

「それは確かに、そうですね。でも魔法使いとして生きているってことは、結構違うと思ってますので」

「違うってのは？」

「だって魔法使いなんて、ろくな人間じゃないと思いませんか。もちろんこれは自分も含めてですし、綿貫さんの悪口を言いたいわけでもないですよ」

「そうか？ 自己弁護じゃないが、世の中の人間なんて大半がろくでなしだろ」

宮乃は首を振る。

「いえ。条件っていうのかな……前提の問題です。本当は魔法使い

なんていなくても、誰だつて生きていけるじゃないですか」

「そうだともいえるが、そうではないともいえた。綿貫は魔法使いが必要となった人間を何度か見てきたことがある。それらは魔法を使わなければ法に触れるようなものが大半だが、苦痛や社会的拘束からの逃避、逃亡手段として、魔法使いが駆り出されたこともあった。そういった人間にとつては、多かれ少なかれ魔法使いの存在がプラスに働いたことになる。」

「本当がどうつても難しい話だ。お前は魔法使いの世界を網羅して、それが存在しなかった場合に、現代に構築されるべき社会をシミュレーションでもしたのか？」

「強力な後ろ盾を持つものが大手を振れるのが世の常だ。その中、何らかの形で魔法使いがバックグラウンドの一つとして扱われる場合もあり、それゆえに重宝される事例がちらほら見え隠れしている。どこに何が絡んでいるかが明瞭でない以上、魔法使いの影響の判断を適切に下すのは難しい。」

「してません。でも、あたしはそういう考えです。テレビだとか雑誌だとか、そういう場には魔法使いの名前がちらりとも出ないんですよ。それって、あってもなくても、同じようなものじゃないですか」

「そう言つて宮乃はテーブルに静かに手を置き、グラスを両手で握つた。」

「だから魔法使い、魔法を使うつてことは、そういう、覚悟が必要なんだと思います。居ても居なくても同じ存在の人に、権利だとかなんて要らないんです。何をされても、何をしても、本当は文句だつて言つちやいけないはずなんです」

「偏っているな、と綿貫は思った。」

「お前が今、突然撃たれても？」

「宮乃は頷く。」

「理由があるのならそれは仕方のないことだと思えます。でもそういう人達が奪つたり、奪われたりすることの中で、他の人を余計に

巻き込むなんてことは許せません。あの男の子だって、混乱したまま暴れ出したら、いろんな人を傷つけていたかもしれないんです。子供はきつと、そんなことも理解できていないんです」

「理解ねえ……」

毛先を弄りながら、綿貫は微笑みを作った。

「私から見れば、お前も似たようなものだよ」

子供へ向けた子供らしい皮肉を僅かに込めた。この行動も、随分と子供じみていたかもしれない。

「やっぱり綿貫さんって本当に、魔法使いらしいと思います」

「私もそう思ってる」

宮乃も笑って、二人は静かに視線を逸らした。

無言のまま、宮乃はカップのスープに口をつけた。容器が動いたからかコンソメの匂いが漂う。宮乃はそのスープに目を落とし、カップを傾けたが、すぐに口を離してテーブルに戻した。

「あたしの両親の話でしたね」

突然さらりと言うと、宮乃はフォークを手にとった。

「二人とも魔法使いでした。父も母も、表面的には普通の人だったんですけどね」

「殺されたのか」

宮乃は頷く。

「いつ？」

「小学三年、七年くらい前だと思います。それであたしと妹は、桐山さんにお世話してもらったことになったんです」

綿貫は携帯を取り出し、桐山の画像を確認した。

「桐山……こいつは生活に余裕があったのか？ 顔写真を見るところそんなに歳食ってねえんだが、七年前ってなると、普通に働いていたとしてもまだ全然じゃないのか」

サラダにフォークが突き刺さる。宮乃はもう少し一挙に口に入りたいのか、さらに何度が押しこむように刺した。

「桐山さんも魔法使いでしたから。収入は十分だって、話してくれ

たことはありません」

綿貫は腕を組んだ。魔法使いを名乗り、「収入が十分」だと発言することは珍しいことではない。しかしそれは、一般的な義務である労働に従事しないことへの皮肉が大半で、二人の子供を養えるだけの収入があるのかとなるとまた話は変わってくる。綿貫は桐山という名前を聞いたことがないし、言伝屋から十二分なほどの仕事が回ってくるとは思えなかった。

「普段の仕事は」

「システムエンジニアだとか言っていましたけど、きっと嘘です」「どうして？」

「小学校の時、親の仕事がどういうものか説明しなきゃいけない授業があつたんです。それで、桐山さんに言われた通りに書いて提出したんですけど、先生にいい加減なこと書くなつて怒られました。それ以来あたしも、そういう話はしないようにしましたし」

フォークが回る。これ以上回しても意味がないが、まだ何かを言いたいがために食べられないようだった。

「あの。あたしも質問していいですか」

手が止まった。綿貫が頷くと、宮乃は疑うような目つきになった。「綿貫さんって、その口調作ってませんか？」

「そうだとっても日常生活に支障は無い。問題あんのか？」

「いえ、あんまり合っていないというか……。会った時から、ずっと違和感があつて」

「口調なんて実際は誰でも意識してるもんだろ。支離滅裂だと信用されないから、お前だって無意識で一定の基準を作ってる。変化に対応できない奴が多いから、いつそ変化させないほうが合理的だつてハナシ。お前の一人称が突然ソレガシとかワガハイになるようなら、私はお前と会話を続けようとは思わないしな」

「ちよつと意味がわかりませんが。いいです、わかりました」

宮乃はまたもぐもぐと口を動かし始めた。食器がぶつかる音が数度鳴るのを、綿貫はしばらく見つめていた。

「やっぱり腹減ってるのか」

「ほどほどに、です」

「そうか。まだ訊きたいことがあるから、そのまま食ってる」

宮乃の食事のペースは一定に保たれている。リラックスのために日常的な行動を取るつもりだったのと綿貫は思っていたが、その様子は最初から至って普通の食事だった。宮乃は銃を持った少年の一件に当惑していたわけではないらしい。

綿貫は宮乃が口を動かすのを止める前に、言葉を次いだ。

「あのビルで何があった」

宮乃は綿貫を見ながら顎を動かす。間もなく、息を飲むのと同じように喉が大きく隆起した。

「その魔法の杖で、お前は鴉に復讐する気か」

彼女の瞳は揺るがない。しかし信念が見えるほど力強くもない。

「今日、親族で保護者でもあった桐山が死んでも、お前は何も感じないのか」

綿貫は小首を傾げ、宮乃の瞳からその心理を覗こうとした。

「目的が達成された後、お前はどうするつもりだ」

だが彼女の心理はかげり曇ってほとんど視えてこなかった。聴覚的には、雑踏の湧く交差点の中心に立ったように、判然としない断片的な感覚が一度に迫り、それぞれがどこかズレているような遊離性が異物感を与えた。

思わず、綿貫は顔をしかめる。

「あたしだって、まだ知りたいことはあるんですよ」

宮乃はそんな綿貫の心理を察したのか、対抗するように声を出した。

「この杖が綿貫さんのものだとしたら、引っ掛かることがあるんです」

「それは多分、私も知りたい疑問の一つだろうな」

綿貫と宮乃はお互いに睨みあい、暴言でも吐くように口を開いた。桐山さんが仕入れた話では、杖の取引現場には鴉が居るはずだっ

た。そうだとしたら綿貫さん、あなたは杖を、鴉に運ばせたことになりませよね」

「その話の情報元は信用に足るものなのか疑わしい。桐山はどこでそれを知った」

「あたしの質問に答えてください」

「お前、こつちに何個質問溜めてると思ってるんだ。好きでおしゃべりしてるわけじゃねえんだよ」

苛立ちのこもった綿貫の言葉には動じない。ミートソースのついた宮乃のフォークは、綿貫の方を向いていた。

「情報源に納得ができませんか。あたしはあなたを疑ってます。千崎さんだって、もしかしたら鴉と関係してると思えることができます。どういう解釈をしてもらっても構いませんが、私が鴉に向ける感情に近いものをあなた達に向けたっていいんです」

「なに、私が折れなきや会話する気もないってか……」

「違います。関係ない人に迷惑をかけたくないから、とにかくはっきりさせてほしいんです。今は鴉を探してもらっていますけど、それ以上はもう、関わってもらわなくて結構ですから。でも、もし綿貫さんが鴉と関係してるなら、少しでいいので話を聞きたいんです」

話している最中、徐々に瞳が広がるようなものへと変わっていた。宮乃は話し終えると、自覚があったのかフォークからスプーンへ持ちかえた。

「なら答えてやるよ。話せるだけ話すと言っておいて、てめえのわがまま押し通そうとしてんじゃねえつつの」

綿貫は溜め息をつく。

「私が杖を運ばせたのは、千崎だ」

宮乃は驚いた様子を見せなかったが、言葉を返そうともしなかった。

9、鎌にかかる

金が底をついた。泥沼に足を取られた千崎は、先払いの五十万円を失った。叫び出したくなる衝動と悲壮を抑え、携帯電話の受話部分に意識を集中した。

「桐山さんは、そうですねえ……」

「もったいぶらなくていい、俺にはもう金がない」

「あ、そつすか。確かに千崎さんの言う通り、彼は最近　　といつても先月あたりですが、上那市の魔法使いの個人情報を集めていましたよ。ウチらに高い金払って、まあまあ何をしようとしてたんでしようねえ」

「そつか……」

皮肉交じりに彼は言った。永井の調子は軽いが、起伏などない。長時間の質問にも感情らしい感情を見せず、機械的に千崎の対応をしている。これでは金のない人間がこれ以上の情報を引き出すのは難しいだろう。

「で、金の無い千崎さん。他に訊きたいことは？」

「金がないと言ったはずだ」

「そつすか、お疲れ様です。情報は十分に得られましたか？」

「答える気はない」

「確かに聞くまでもありませんね。アナタが何をしたいのか、大体想像がつくくらいには質問をされましたし」

千崎は名残り惜しさのようなものを感じ、次の言葉を待った。永井も電話を切ろうとしなかった。耳を傾け固まっていると、鼻で笑うような音が聞こえた。

「そうですね……せつかなのでサービスしましょうか。ウチらに訊かなくても知れる、多分必要かもしれない情報を、個人的に千崎さんへ提供してあげましょう」

すると突然永井は言った。千崎はそろそろ、彼の軽薄そうに見せる素振りに嫌悪感すら覚えていた。

「アナタが五十万かけて知った柿原さんと桐山さんのことなんですか」

「なんだ」

「今朝、二人とも死んでいたと報道されましたよ」

「死んでいた？」

「千崎さんが運んだ杖の取引先でね」

「……まさか」

「情報料の振込先はいつものところです。では失礼」

ぷつつ、と通話が終了する。耳にできたかさぶたを引きちぎるような不快感があった。千崎は即座に携帯を畳み、ジーンズに押し込んだ。元のテーブルに視線を向けると、宮乃はもう食事を終えていた。

千崎は大股で席に戻り、綿貫の隣に座った。

「遅い」

綿貫は千崎の顔も見ずに言う。前に座る宮乃は、グラスの水を口に含んだ。

「仕方がなかった、悪い」

千崎は固く腕を組み、手前のテーブルの端をじっと見つめる。

「どうかしたんですか？」

グラスをテーブルに置く音がした後に、宮乃が言った。

「特別何があったわけでもないが。言伝屋を知っているか」

「はい。仲介屋さんですよ」

そこまで言っただけで一旦呼吸を止め、これ以上を言う必要がないのではないかと思う。何より情けなく、払った金をドブに捨てたとなるという顔をされないかもしれない。

「千崎さん？」

だが、この失態を誰かに聞いてほしいのは確かだった。むしろ状況が好転するかもしれない。五十万払って全くの成果無しとなると、

本気で自分自身の浅はかさを疑いかねない。

「……奴らから情報を買ったが、金額分の利を得られなかったかもしれない」

「ものを考えて行動しろ。馬鹿なのか、お前」

「何も言わないでくれ」

綿貫があまりにも当然のように言ってしまったために、千崎もそれを簡単に受け入れてしまった。自分は頭が良い方ではないが、あからさまな失態を犯す人間ではないと自負していたのだが、それこそが間違いであったと気付いたのだ。

しかし「どんな情報を買ったんですか？」と、宮乃は特段変わったことも言わなかった。

「それは……」

ここで千崎はまた考える。永井から聞いた情報を整理する時間が欲しかった。

「いや宮乃。その前に、君には訊きたいことがあった」

「なんでですか？」

「桐山鏡きやうやまのかがみ、という人物を知っているな」

千崎が思い切って言うと、宮乃は口をおおと開けて軽く頷いた。

「あ、その情報を買ったんですか？ 別に訊かれれば答えましたよ、そんなこと」

「なんだと」

「隠す話ではないと思いますから。ちょうど今、綿貫さんに話していましたし」

綿貫に目を合わせると、馬鹿をあわれむような慈しみの混じる流し目が千崎に返ってきた。この二人の様子を見ると、金をかけたこの話は本当の意味で無駄になってしまっていたことが確認できた。

「何故それを……」

言わなかったのだ、と言おうとした。だが、千崎は訊ねようとしていない。言い切る前に口を閉じると、宮乃がその様子を察したように口を開いた。

「言わなかったのはあたしですけど、それは綿貫さんが妨害したんですよ。あたしのことを詮索する必要はない、とか言ってたじゃないですか」

そんなことがあったかもしれない。しかしそうだとしても、宮乃の目的は鴉を捕まえることであるのだから、宮乃と桐山の関係について訊く必要はなかったのだ。桐山の名前も永井から初めて聞いたものであって、以前の時点で宮乃にそれを訊けるような話は知らない。

「そうだったな」

千崎は組んでいた腕を解く。これからどう動くべきか、模索する必要があった。

宮乃の依頼を達成し、既に漏れている鴉の情報元を、どうにか断たなければならぬ。しかし依頼については実際に達成することが不可能である。結局千崎にできることは、自身が鴉であると知っている人物を排除することだ。

永井の情報を整理するなら、桐山は言伝屋から上那市の魔法使いの個人情報漁っており、セガミと魔法使い関連で繋がりのある魔具売りだった。そして宮乃あさぎと、その妹の保護者に当たる人物である。柿原はというと、その桐山が消息を断ってからセガミに使われることになった運び屋だ。

手掛かりへの問題は、既に二人が死んでいるということにあった。これでは桐山や柿原を当たるうにも手を出せない。もっとも取引先で死んでいたとなれば、考えられることは多くないのだが。

「話をしたいんだが、綿貫とはどこまで話しているんだ」

すると宮乃は困ったような苦笑いになり、綿貫に視線を移した。

「それは私から話す」

綿貫は早口で言うと、席を立った。

「宮乃、席を外せるか？ なんなら私達が少し外すが」

「いいです。あたしは下に行ってますから。何かあれば連絡しますし、話が終わったならよろしくお願ひしますね」

「悪いな」

いいえ、と言つて、宮乃は鞆を背負つてテーブルをさつさと離れていった。元々そうするつもりだったようで、綿貫とは連絡先も既に交換し終えているらしい。

宮乃が去ると、千崎の正面に綿貫は移動し、ちょうど宮乃と入れ換わる形になった。

「宮乃のことは言伝屋から聞いたんだな」

綿貫は呆れたように言つて、どっかりと座りこむ。

「ああ、柿原と桐山を調べる最中に彼女の名前も出た。宮乃も魔法が使えると判断されているそうだ。言伝屋の魔法使いを特定するアソナテナは、随分と感度が良いらしい」

「そうかよ。なら、あいつが鴉を追つてる理由は」

「両親が亡くなったため、桐山が彼女達の世話をすることになったと聞いている。その話と宮乃の様子を突き合わせてみれば、馬鹿でもおおよその想像はつく」

「そうか、と綿貫は呟き、片手で額を支えるように肘をついた。

「だから、お前に詮索はいらねえんだ」

「何が言いたい」

「具体的な話を知った上で、いざつて時にお前は宮乃をやれんのかよ」

頭を起こすと、綿貫は千崎を睨みつけた。

「必要があれば、俺は」

「必要があれば？ 鴉を追ってる人間なんてさつさとやりやいだろつが。お前の行動は非合理もいとこだろ、大した報酬もねえのに」

「無駄なことはしない」

「だったら誰もやれねえよ。鴉のやること自体が、無駄そのものだ」

綿貫の話は以前から頻繁に交わされているものだ。それでも千崎は綿貫の考えに同調することはない。

「話はそれだけか」

「いいや。さつきセガミから連絡が入った」

「今更だな」

「明日までに杖を寄越すなら、報酬は通常どおり払うって話になったんだよ。お前に回した案件でもあるし、この判断は、一応だがお前に任せるつもりだ」

「俺の通帳が空なのも結局はそのせいだったのか。なるほど」千崎は腕を組み直した。

「暢気な事言ってんじゃねえ。お前はどっちを優先するのか、それを私は聞きたい。さつさと宮乃から杖を奪えばセガミから報酬が降りるし、いつそバラしまえば後腐れも無い。それともお前は宮乃から金を絞り取った上で、さらに杖も奪ってからセガミに行くのか。より多く金を稼ぎたいなら鴉を捕まえるしかねえが、その相手も居ない」

そう綿貫は言うが、問題は宮乃の件だけではない。

「前島の方も対処しておかなければ後々厄介になる。宮乃と俺のどちらか、または両方を狙っているなら、今のままのほうがいい」

「追い詰めようとして逃げられてんだろ？ どう捕まえんだよ。それにセガミは明日までも言ってるし、一挙両得は厳しいんじゃないか。今回のことに私は口を出したくはないが、どうもお前の馬鹿さ加減は目に余る。何がしたいのか理解できない。言伝屋まで使つて、得られた成果はあったのか？」

「成果か」

その質問に対して答えてしまおうか千崎は少し悩んだが、綿貫には言うことにした。綿貫が宮乃から何を聞いているのかも、まとめて整理をしたかった。

「無いわけではない。桐山が上那市の魔法使いを調べていたことがわかった。おそらく前島やあの少年は、その時に桐山に目を付けられていたんだろう。だがそうになると、桐山が鴉について知っていないと辻褄が合わなくなる」

「少なくとも、宮乃はお前のことを知らないようだが」

「そうだ、つまりはそこに不可解がある。桐山が知っているならば宮乃が知らない理由を考えにくい。お前は何か聞いていないのか」「さあな。私は桐山が死んでいること、宮乃がその関係者であること、あとは鴉にそれなりの感情を抱いていることしか知らん」綿貫は頼杖をつく。「まあ、あいつもある程度の質問には答えるつもりだろうが。鴉を追うにあたってそこまでの質問が必要なのかと訊かれれば、こっちの答えはノー以外にあり得ない。お前の都合で話を聞こうとしていることになる」

そこまで話して、千崎は腕を組む。

「多少話をする程度で、どこまでいくと疑われる？」

綿貫の顔が僅かに強張った。

「いや、もう疑われてんだよ。下手すりゃお前はやられるかもな」

「……宮乃にか？ どうして俺が既に疑われているんだ」

「あいつが持つてる杖が私のものだったんだと伝えた。ついでに、その杖はお前が運んだのだとも教えたんだ」

綿貫は当たり前のように言ったが、千崎にとってそれはかなり危ういラインの問題ではないかと思えた。宮乃から見ても、消去法で考えればあの廃ビルに居た人物は千崎しか残っていない。事前に知っていた「鴉が居る」という情報を、宮乃が事前に信用に足る程度の根拠の上で信じていたとしたら、鴉は千崎以外にありえないと断定できる。

「どうしてそんなことを」

ふざけた話だ。これでは宮乃への話がうまく回らない。最も疑われる位置に千崎自身が居れば、鴉としての相手を無理にでも立てることができなくなる。

「私も私の身が大事だからな。はっきり言うなら、宮乃に手の内を明かしておけば私が直接やられることはない。発狂されて刺されるのは御免だしな」

「何の話だ」

綿貫は表情を変えない。

「どうせお前は、もう逃げ腰じゃいられない。あの銃持ったガキもそうだが、お前の話じゃ前島も鴉のことを知ってたんだろ。あんな形で直接手を出してきた奴らを生かしておく理由はないし、ああいう連中はあいつらだけじゃない。今日明日にでもまだまだ来るかもしれない」

「俺が逃げようが殺されようが、お前には関係無いだろう」

「馬鹿言ってるじゃねえぞ千崎。私はお前を逃がさないし、簡単には死なせない」

千崎は顔をしかめ、綿貫を睨んだ。彼女はただ冷たく見つめかえすのみだった。

「選ぶ余地なんてほとんどないんだよ。さっさとセガミから報酬を受けとんのか、もしくはそれ含みで宮乃の依頼までやってやるのか。前者なら来る者全て皆殺しで済むが、後者だとセガミの件に間に合わない場合もある上に、ハイリスクで見返りが少ない」

「宮乃については手を出さなくていい場合もあり得ただろう。お前が余計なことをしなければ」

「待てよ。宮乃には、鴉があの場合に居たはずがないという話もした。絶対に納得はしていないだろうが、あいつはお前を即座に鴉と断定する気もないようだった」

綿貫はテーブルに身を乗り出し、千崎に顔を近づけた。

「この意味がわからないほど、お前は馬鹿じゃないよな」

「わからないと言いたいが、それを許す気はあるか」

「ない」

「そうか」

綿貫は力が抜けたように、椅子の背もたれに倒れ込む。

「つーか難しい話はしてねえだろ。お前、自分の立場わかってんのか」

「一応わかっているつもりなんだが」

「ならどうしてそれらしく振る舞おうとしない。そもそもお前が日

頃からフリーターとかやって中途半端でいるから、今日みたいなことになるんだよ」

呆れたと言わんばかりに目頭を揉み、綿貫は首を左右に振った。

「俺はできる限り身を隠している。むしろ今回のように見られることのほうが想定外だ。この原因を探らなければ、今後にも深く影響が出てしまう」

千崎が平坦な声で言うと、綿貫は驚いたように目を見開いた。

「今後って、もう今までのようにはいかねえよ。馬鹿なのかお前」

「それでも俺はまだ気楽な生活を諦めたくない。基本的には、俺はコンビニに立つ仕事の方が向いているんだ」

「そういう台詞は、打開案が思いついてからにしろ」

綿貫はそう言うと、携帯電話を開いた。

「っーか……。まあいいか、そう言うなら話は終わりだ。お前が馬鹿だつてことがよくわかったよ。確実に後悔する結果になるだろうが、言っても無駄だろうし、勝手にやって痛い目見る」

話しながら耳にあてる。宮乃へと電話をかけ始めたのだろう。

「それが俺をあえて追いこんだ人間の言葉が……」

宮乃に疑われてしまうという条件が付き、千崎はさらに不利な立場に置かれただけだ。千崎が鴉であると知っている人物があとどれほどいるかは想像のしようがなく、もしも前島などがその情報を広めていった場合、千崎は様々な相手から追われることになる。

現状では、フリーターを兼ねている千崎へ魔法使いの仕事が回されるのは綿貫につてがあるため、鴉としての評価を言伝屋から受けているわけではない。もしも言伝屋が鴉の情報を知ったなら、様々な依頼も回るだろうが、誰かの標的にもされることも間違いがない。

鴉は他人の恨みを買うに十分な経歴がある。それを一身に受ける危険性を排除する、何らかの手立てを考えなければならぬ。

「宮乃か。悪かった、もう話は終わったぞ」

電話が繋がったらしい。が、綿貫は途中で話すのを止めた。

「あ？ ああ、そうか……なら、私達がそっちに行く」

すぐに綿貫は電話を切って、テーブルの伝票を手を取った。千崎はどうしたのかと訊ねると、彼女は早口で言った。

「宮乃が前島を見つけた。三階、紳士服売り場でのんびり試着をしていたと」

「前島は消えていなかったのか」

「実際に見かけたんなら私の魔法は信用しなくていい。さっさと行くぞ」

すぐに支払いを済ませ、千崎は階下に向かいながら宮乃の連絡先が書かれた紙を受け取った。

「宮乃に指示は？」

廃ビルの前で遭遇した前島は、魔法による無差別な攻撃を躊躇しない。もしデパート内で彼が暴れでもすれば、昼間と同様の被害が出るのは確実だ。

「出してねえよ、電話聞いてたろ。さすがにあいつもいきなり喧嘩を吹っ掛けるような馬鹿じゃねえだろうし」

「彼女は狙われる側だぞ。何故そんな行動に出る」

「そう言つと、綿貫は困つたような顔になった。」

「お前、さっきの話聞いてたか」

「何だ」

「宮乃はお前が鴉だと断定はしていないが、疑惑は当然ある。だからまあ、お前の周辺、特に今みたいに鴉に繋がりがいることが他にもありそうなら、そっちも追つた方がいいって考えになってんだろ。体張つてでも、追う理由があるんだからな」

千崎はなるほど、と頷いた。綿貫はさらに付け足す。

「とにかく、今の状況であいつから前島に喧嘩を売ることはないだろうが、前島が宮乃を見つけるとどうなるかだ。お前はあいつとまともに接触してるだろ。即刻危険に発展するような奴なのか？」

「ああ」

前島の第一目標が魔法の杖なら、宮乃に気付いた段階で何らかの

アクションを起こすかもしれない。素直に考えて、魔法の杖の存在を知っておきながら、前島がそのまま黙殺することは考えにくい。いくら仕事をしていないとしても、魔法を純粹に強力なものへと変える杖の価値を、理解できないはずがない。

「少なくとも、良い方には転がらないだろう」

何にしる急ぐべきだ。エスカレータを歩いて下り、千崎はデパートに異変がないか聞き耳を立てた。十階から下っていく間のどの階でも通常営業は続いており、前島が派手に暴れていないことだけはわかる。

やがて進んでいくうちに、僅かに異変があった。

有越デパートの各階層では、販売物に対してそれぞれテーマに沿ったBGMが流されている。十階から降りていく最中にも、注意すれば何が流れているかは把握できた。その音量は商品選択を阻害しない程度に小さなもので、客の話声や、店員の呼びかけに比べると気にもならない音である。

しかし三階へ降りていくエスカレータでは、その音楽しか聞こえない。頭の上から聞こえてくる四階との音量の差異が、静けさを実際立てていた。

誰も居ないのか。そんなわけがないと思いつつも、千崎はエスカレータから紳士服売り場を見下ろした。

「綿貫」

「今掛ける」

振り返らずに千崎は言った。三階の様子は、明らかに異常なものといえた。

立っている人間がいない。中年の男性と女性が姿見の前で倒れている姿や、スーツの女性店員がワイシャツを床に散らばらせ、その上に伏せているのが見えた。背広のハンガーラックにもたれている青年や、レジカウンターに前のめりになる男性も居り、それらは全て突如発生した出来事であることが想像できた。

「これも前島の仕業か」

三階に着くと、千崎はまた周囲を見渡した。夕飯時であったためか、人はそれほど多くはないと思えた。エスカレータのすぐ近くに倒れていた中年女性に駆け寄り、肩を揺すった。

「大丈夫ですか」千崎は何度か声をかけた。女性の瞼の奥で瞳が動く。少なくとも死んではいないようだったが、目をすぐに覚ますというわけでもなかった。

携帯電話をぱたと閉じる音がして、綿貫が近づいてきた。

「電話は繋がらない。つーか、出てすぐに切ったな。接近してんのかもしれない」

「俺達の下に居た客も、登ってくる客もこれに気付いていないということは、こうなったのはついさっきのはずだ。すぐ近くに居てもおかしくないんだが」

綿貫は頷いた。

「宮乃が電話を切ったのは、音に警戒したのかもしれないな」

「……隣の駐車場に行く。渡り廊下はどっちだ」

「天井に書いてるだろ、急ぐぞ」

ぶら下がる案内板を確認し、すぐに移動した。デパート西側に渡り廊下が太く伸びており、リノリウム素材が開けた空間と相まって、足音をかつんと反響させた。駐車場への入り口は開閉式の自動ドアとなっている。

駆け足で駐車場まで着く。駐車場の方には、特に不審なものは見当たらなかった。

その時、綿貫の携帯が鳴った。

「宮乃からだ」

「貸せ」

千崎はそれを奪い取り、通話ボタンを押した。

「千崎だ」

短い息遣いが聞こえてきた。

「あっ、千崎さん。宮乃あさぎです」

小さな声で聞き取りにかかったが、宮乃本人であることはわかる。

「どこにいる。まだデパートか」

「今は動いている車の荷台の中です。デパートからは多分もう出ます。追いかけてください」

「どの車に乗った」

「オレンジ色の柿原運送と書いている、ええと、小さめの自動車です。前島さんと女の人が居ます。では」

「待て、宮乃」

有無を言わせず通話が終わり、千崎は階段へ向かいながら綿貫へ電話を返した。

「お前の車は二階だったな」

下りていきながら言う。

「ああ。電話のほうは？」

「前島は柿原の車を使っているようだ。個人の運送業者なのか、柿原本人の名前が書かれた車に今は乗っているらしい」

「分かりやすくいいじゃねえか」

「それと前島には連れの女が居るそうだ」

「連れの女？ 魔法使いか？」

「そうだろうな、そう考えて差し支えは無い」

駐車場の二階に着き、すぐに綿貫の車へと向かった。綿貫は乗りこんでキーを挿しこみ、すかさずエンジンをかけた。

「ったく。車に杖を置いとけば、今の内にセガミに行って終わりなんだけどな」

左右とルームミラーを確認しつつ、綿貫は呆れたように言った。

「冗談を言っている場合か」

「付き合ってたやっつてんだぞ。私の口ぐらい好きに使わせる」

「それは悪いと思っている」

そこまで言い、千崎は少し前に宮乃と話したことを思い出した。

「お前にはここまでしてもらおう義理も無いつもりだったんだが、すまない」

そう千崎が口になると、綿貫はアクセルを踏んだ。車はゆっくり

と右に折れ、出口へのスロープへと向かう。

「馬鹿かよ、義理なら一応あるつつうの。もちろん私の都合だが、お前の問題でもある」

「そうだったか」

駐車場の出入り口にやってくると、入る際に文句を言われた警備員の姿があった。前島の車について訊ねようと千崎は思ったが、逐一把握しているとも考えにくい。

車道の前で警備員の誘導棒が静止のサインを出し、綿貫の運転する車は止まった。

千崎は首を傾げながら窓を開け、警備員に手を振った。

「ちよつとすいません」

「あー、あんたら」

警備員はまた機嫌を悪くさせているようで、眉をひそめている。

ちらちらと歩道を見つつ、通過するよう促した。

「ついさっきまでに小さいトラックを見かけませんでしたか？ オレンジ色の」

すると警備員は口を尖らせ、車の後部を覗いた。

「見たことあると思ったら、やっぱりあんたらのところに乗ってた子だったのか」

「車、見たんですか？」

「見たよ。そのトラックの後ろに女の子が乗ってたんだ。出ていく時にちよつと顔出して、こっちに手を振ったからね。何かかと思つて驚いたよ」

「その車、どっちに行つたか覚えてます？」

「ここは左折のみだからわからないけどね。そのまますぐ行つたのは見えたかな」

この駐車場から見える範囲で真っ直ぐといつてもたかが知れているが、聞く価値はあったようだった。千崎が感謝を述べると、警備員も軽く会釈をして、誘導棒を振る作業に戻る。

「多少飛ばせば追いつけるか？」

にあちらとの間に数台挟むよう距離を保ち、その後ろを追跡する。

「前島はどこに向かっている」

千崎は揺られながら、思いつきの疑問を口にした。

「どこだろうな。何考えてんのかわかんねえし、どうとでも言える」

「確かに分からないが」

前島に関しては不可解な点がいくつかあった。突然襲ってきたかと思えば、逃げた千崎を追いもしなかったのだ。同じく千崎を狙っていた少年が一人でやってきたところを見ると、この二人に直接の関係はありそうにない。

一方で二人の共通点は、千崎に攻撃的な態度を見せていることにある。これは桐山が何らかの手段で得た千崎の情報を、彼らに流したからだとしか考えられない。桐山が上那市の魔法使いについて調べていたのも、鴉と縁のある人物を探すためだとするのが合理的だ。だが前島は現在女と居るといふ。それが前島の協力者だとすると、どうして協力者を得られる前島が単独でやってきたのかがわからない。鴉を狙おうというのなら数で押しきってしまえばいい。わざわざ自身の存在を示唆させなくとも、十分な準備の後に襲撃をすれば済む話だ。前島がもし同じ目的をもった協力者を得る方法があったのなら、同様の手段で千崎を知ったと思われる少年を、独りで行かせるようなこともさせないはずだ。

そこに大した理由などないのかもしれないが、何処か気にかかる。「彼らの目的は何なんだ」

本当に自分を狙っているのか、という確認を込めて言った。

「お前の疑問の意味がわからねえよ。何だろうが、やることは大して変わんねえんだろ」

綿貫は事務的に応える。

「そのつもりではあるんだが、どうも釈然としない」

「知るか。もうこれ以上、私は口を出さないからな。面倒は見てやるがこっちは期待するな。自分の行動の責任は、全部自分で負え」

「言われてみるとその通りだ。すまん」

千崎は頭を後ろに倒した。進んでいく街の景色の中に時折オレンジ色がちらつく。少年の流した色と比べると、それは幾分か気の抜けた、抽象的なものに見えた。

「それからな、千崎」

手前の信号が赤に変わり、前島の車が遠ざかった。呼んできた綿貫を見ると、彼女は前を見たままハンドルを指先で叩いていた。

「忘れるなよ。お前は一心、殺されて当然の人間だ」

分かっていて、と千崎は返事をする。

綿貫は鼻から深い息を吐き、聞こえよがしに舌打ちをした。

10、兼帯少女

揺れる荷台の隅で膝を抱えていると、何故だか寂しくなる。独りであることに怯えているわけではないし、路頭に迷ったつもりはなく、ただ寂しかった。

安心できるものがないために、自分の膝を抱きしめる。内に閉じている感覚を守ろうと必死になっているのかもしれない。それとも未だ折り合いが付けられない内面を整理するのが、億劫になっているのだろうか。

宮乃あさぎはどこにでもいる普通の少女だった。

両親とは家族としての仲を保っていたし、妹との関係がこじれたことなどは一度もない。同年代の友人も平均以上には居て、異性として好意を抱いた人間もいた。その中で強烈な刺激にあてられたということもなく、一般的な人格を形成するのに十分な交友関係、それを維持するためのマニュアルも、無意識の中で構築されていた。自分が不幸だと思ったことはなく、自分が恵まれた環境に居るのも思わなかった。現状があれば平均を走ることができるのだから、それ以上は望まないし、それ以下に無理に目を向けることはなかった。彼女が平穩の中で夢想する未来のビジョンは、現在の延長線上にあるものだった。そこに疑問など、持つはずもなかった。

例えば、親友がアスレチックで骨を折れば彼女は当たり前のように泣いた。妹が風邪で高熱を出せば心配をし、伝染されるまで看病を続けた。プールの端から端までを泳ぎ切れたことに感激したり、好きな異性にチョコレートを渡そうとして、やはり諦めたこともあった。

当たり前がそこにあつたのだから、彼女は抵抗なくそれを受け入れる。あらかじめ記述された物語をなぞるように、しかるべき経過が彼女に用意されているかのようだった。

異変があつたのは小学三年になったとき。急に彼女は、他人の顔

色が気になるようになった。

それまでも悪戯や失敗をして誰かに怒られたことはある。笑みを向けられたことも、嫌がられたこともある。しかしそういった表面的な表情や態度とは別に、人が見せない内面を、曖昧に感じとれるようになっていた。笑っている人間でも、胸の内では笑っていない場合があると知り、そういった人間を刺激しないよう観察する癖がついた。

彼女はその曖昧な感触を観測する相手を区別しなかった。そのため彼女の異変に両親が気付くまで、そう時間はかからなかった。

「どこにいくの？」

荷台の上にある、薄く小さな窓を挟んだ車の前方で、女性の声が出た。宮乃は耳をそばだて、膝をぎゅっと締めた。

「この車の処分をしようと思ってるよ。解体所ならなんだか色々都合がいいと聞いているんだ。これももう死んだ人間の車だし、潰したほうがいいよね。別の車も既に用意してあるらしいから、まあ、乗り換えだ」

前方右側の男が子供のような口調で言った。そういえば、男は前島という名前だった。

「へえ、そうなの。その後は？」

女性の方は随分気の抜けた話し方だな、と宮乃は目を閉じて息をひそめた。

「その後？ 横谷さんは聞いていないの？」

「ええ」

女性は横谷よこひという名前らしい。宮乃は銃を持った少年の顔を思い浮かべた。

「そこで彼を待つんだ。必要だつて聞いているし、僕も彼にはまだ用がある。横谷さんもそのつもりで合流したんだと思っていただけ、違ったのかな」

前島が皮肉るように言い、少しの間沈黙が流れた。

「……私は別に、縁を切りたかったただけだから。あとは惰性ね。一

応だけど私も関わったことだし、頭数には入れてもらえてるでしょ？」

「ははは、ひどい人だ」

「あなたに言われると冗談に聞こえる」

「冗談ねえ。それこそ冗談かと思うよ。僕がどんな人間だろうとあなたにはひどい人だ」

前島はきつぱりと言った。横谷はふうんと鼻で返事をするだけで何も言い返さなかった。

二人の会話を聞いて、宮乃は自分の両親を思い出した。どこか抽象的な話しかしないところや、感情的になりきらない言葉の応酬が、彼らと似ているような気がした。

腹の内では何を考えているかわからない二人。両親の接してくる言葉や手は温かいものだが、宮乃が観測する両親の内面は、どこかに穴が空いているような虚ろさで、その見た目は全く噛み合わなかった。気付けば大人の大半はそうで、友人達の一部もそうだった。両親は、宮乃の観察するような目にすぐに気付いた。宮乃自身もいつの間にか、気付かれたことに気付いた。今までの暮らしの中に、両親が自分を注意深く見るような感覚を受けたことは、一度もなかったからだ。

それでも表面的には家族であったし、血縁的にも家族であったし、なにより宮乃は家族が好きだった。それくらいの距離感があってもいいと、その時は思っていた。

「ところで」

前島が思いついたように言った。

「桐山さんのことだけど、横谷さんは何か思うところはあある？」

宮乃は思わず肩をびくつかせた。ここで彼の口から桐山の名前が出るとは考えていなかった。

「何かって、別に。変わり者とか？」

かわりもの。確かにそうだな、と宮乃は思った。同時に妙に懐かしいような気になった。つい今朝までは共に居たのに、もう、どこ

か遠かった。

桐山からは、自分の異変が自分自身によつて観測された『あるもの』であると聞いた。観測されたそれは人の内部で形成され、一つの現象として形をとり、観測した人間に意味を与える。宮乃の観測した外部情報は他人が無意識的に行う仕草や言葉の僅かな揺れ動きで、それにより形どられたものはひどく曖昧な感触であり、胸に受けるその感触は、肉体的でない新たな受容感覚、『現象言語』として定義されるものであった。

現象言語は一度観測してしまえば、条件さえ合えばいくらでも感じとることができるという。とりわけ宮乃が観測した言語は、単純に人間を介したものを切欠としているため、いつでも観測することが可能なものであった。

そして言語の感覚を知っている人間は、いつからか魔法使いと呼ばれていた。観測した言語を操ることを、まとめて魔法と呼んでいたのだ。宮乃に観測した言語を操ることなどはできなかつたが、触れた段階で、それは操っているも同じことだという。

つまり宮乃あさは桐山鏡と出会ったことで、自分が魔法使いであることを知った。

「魔法使いだからね。確かに、変わり者かもしれない」

前島は言った。彼も、変わり者なのだろうか。

「とうかまあ、どう考えても普通ではないわね。まさかいきなり死ぬなんて、思ってもなかつた」

宮乃は小さくゆつくりと呼吸して、聞き耳をさらにたてた。

「そうかな。人が死ぬのは自然の摂理だ」

冗談めかして前島は笑った。宮乃は前島の行動を想起し、怒鳴りつけたくなった。

「死にかたの問題よ」

横谷はやれやれといったような声を出した。桐山の死には問題があつたのだろうか。宮乃はその時の様子を、よく知らない。

前島は「ああ」と今思い出したかのように笑うと、嬉々として言

葉を吐きだした。

「未練が残らないように、頭を叩き潰したね」

背筋がざわついた。背負った学生鞆の中に何が入っているかを考えた。

宮乃は桐山から、自身の両親を殺した鴉が魔法の杖の取引に出ると情報を受け、杖の強奪、ひいては鴉との接触を求め、準備をしていたのだ。

桐山は、現象言語を物的に再構成し、構成言語として独立させる『ある現象』を『ある現象』として、魔法使いを通じない、現象のみを単体で運用する手段を持っており、それを『魔具』として人に売っていた。魔法の杖は観測される現象を理解することで、変化や発生に至るまでの現象へ自発的に手を加えることができるといい、桐山にはそれがとても必要なものだと思っていた。

そのため昨日から今朝にかけて。桐山は杖に向け、宮乃は鴉に向け、互いを補えるよう動くつもりだった。桐山は宮乃に、その補助のために魔具をいくらか託していた。

鞆の中には三本のボールペンがあった。そのうち一つは投げると高速で回転し、人体なら容易に貫通する。一つは内部のインクを垂らすと発火する。残り一つは、ボールペンで書いたことばを読ませることで、読ませた人間の思考にそのことばを優先させる。

武器として使えそうなものは、もうそれしかなかった。後はビデオカメラや、逃走用の道具が大半だ。

これでは足りないかもしれない。

そう結論付け、また膝を強く抱きしめた。

「話を聞いただけで吐きそうになる」

二人は日常の一端のように、ごく普通に話していた。直接顔を見ることができれば、宮乃には二人が何を考えているか、ある程度感じることができたのかもしれない。

「いきなり吐くのだけは勘弁してほしい。僕は忍耐力がないんだ」

「あら、そう」

会話はそこで途切れた。

彼らはどうやら、桐山の存在を知っているらしかった。特に前島に関しては、桐山を手にかけてような発言まで見られる。

綿貫から聞いた「千崎が鴉でない」という話と、桐山の情報を全て信じるなら、前島が最も鴉に近い立場にあるのではないかと宮乃は思った。検証の手は無い。綿貫の内面は全く読めず、桐山はといえば、本当のことを言っているように見えた。そして千崎は、鴉だとは思えなかった。こちらにも確実な根拠はない。今まで話した彼の印象と、鴉は合致していないような気がしていた。

とすれば前島が鴉なのだろうか。

数時間前の様子では、前島は魔法の杖を狙っていたようだった。ということは彼は、魔法の杖の存在を知っていることになる。桐山と接触した際、魔法の杖が既になくなっていたことに気付いたのかもしれない。

今日の深夜のことだ。桐山は柿原から魔法の杖を強奪したが、柿原もただ奪われることはせず、すぐに争いになった。そこで桐山は杖から柿原を引き離し確実に逃げる策として、一時的に柿原と対峙すると言った。魔法の杖を宮乃に託し「後で合流しよう」と。そして、取引現場に現れなかった宮乃の目的のために、市内で有力な魔法使いの名を伝えた。いざとなった時、杖を奪ったことによって追手が来るかもしれないため、その有力な魔法使いとの契約には、魔法の杖を担保とすればいいとも桐山は言っていた。しかし以降の連絡は取れず、彼がどうなっていたかもわからなかった。

そこに前島が絡んでいたのだとしたら。二人が残ったあのビルに、桐山と同じ目的で前島がやってきたのだとしたら。柿原を殺し、桐山を殺し、魔法の杖を見つけられなかったのなら。

宮乃はむっと眉間に皺を寄せた。

仮に殺人を犯していたとして、「桐山さん」と呼ぶ意図がわからない。前島が一体どういう人間なのか彼女には想像がつかなかった。人殺しに気負う様子のない彼は、確かに殺し屋としては適切な人格

を獲得しているのかもしれないが、どうも釈然としなかった。

ならばどうして、彼は今まで誰にも捕えられなかったのか。実際に前島を見ている限りでは、それほど利口には見えず、全うな団体が動けばすぐに殺されるのでは、と感じた。

宮乃は以前から鴉を追いたいと思っていた。そのために今回綿貫を訪ね、千崎に依頼が回り、鴉を捕まえることになった。千崎は多少の難色を示していたが、鴉を捕まえると言い切った。

はたして、どうしてそれが千崎に出来るのだろうか。すぐそこにいるような前島なら捕まえることが出来るのかもしれない。だが鴉は、その程度のものなのか。数十人の魔法使いを殺し、パスポートの申請すら通らない世界にいながら、多様なものから逃げ続けている鴉が。

そもそも千崎は前島を鴉だと認識していなかったのではなかったか。千崎は一体、何を見据えて行動していたのだろうか。横谷という女、そして同じ名前の少年は、誰なのか。前島との関係は何なのか、桐山とは何か関係があるのか。

わからない。全てに見当すら付けられない。

自分の知識が状況と全く噛み合っていなかった。

他人の内面を見た際の、印象の齟齬に似ていた。

知らないことが多すぎた。わかっていることが、自分には足りていなかったのだ。

考えを改めるために目をきゅっと閉めると、そのまま力が抜けた。眠気が急に襲ってきたような気がした。突拍子もなく訪れた奇妙な感覚を受け、閉じた口の中で歯を食いしばった。

「あ。それとさ、前島くん」

ふいに、黙っていた横谷が言った。そちらに意識を向けるが、何故だか貧血のようにぼうつとしていた。

「なんだい」

前島もすぐに応じる。

「後ろの子、どうするの？」

宮乃は目をぱちくりさせたつもりだったが、瞼は完全におちいてた。

「どつって言われてもね……愛嬌のある子だし、簡単に殺してしま
うのは可哀想だとは思うかな。一旦はこうして、預かるしかない
思ってるよ」

「ふうん、ならよかった。私、子供好きだから」

緊張しているはずなのに、心臓がどくりと激しく脈打つことも無
かった。

「子供好きか。横谷さんもとんでもないことを言うもんだね」

「普通よ」

薄れていく感覚がただ心地よかった。自分の顔の横に、冷たく硬
い車の荷台があった。

「やっぱり男の子より、女の子の方がかわいいもの」

倒れていることを自覚して、宮乃はようやく、この理由に合点が
いった。

「ははは。あなたは、本当に酷い人だ」

彼らがデパートの紳士服売り場でスーツを選び終えた直後、周囲
の人間が時を同じくして倒れた。しかし宮乃の体には異常が無
く、これは好機だとその後ろを密かに追ったつもりだった。

「魔法使いには言われたくないわ。しかも、社会からあぶれたクズ
なんでしょ？」

「僕も今まさに魔法を使っている人には言われたくないかな。特に
そうだ、折檻好きの下種にはね」

二人は笑った。

彼らの顔や仕草を見なくても、それが本心からの笑い声でないこ
とはすぐに分かった。

そしてようやく宮乃は、気付かれていたことに気付いた。いつか
両親から受けた感覚が、舞い戻ったかのようだった。焦燥にのまれ
つつも意識は無自覚に、柔らかな感覚のほうにゆっくりと立ち去る
うとしていた。

どうすることもできないことを受け入れるのは、本当に容易い。

「いや」

拒絶することを諦めてしまうのはとても簡単だ。

いっそ重圧に折れてしまえば、すぐに楽になることができる。

「いやだ」

あらがうことが難しいのはわかる。それに応じた労力が得られないことも、とつくに知っている。だから多くを望まないし、手の届くものだけで充たされるよう、自分の希望を縮小してきた。

けれど自分はそんな理由を盾にして、行動することから目を背けていただけだということも、とうに知っていた。だからこそ杖を持ったことで、それを自分の支えとしようとしたつもりだった。

せめて支えのある今だけでも、ひとつ掲げた目的だけは、達成したかった。

「やだよ」

それでも逃げていく自分の弱さは、悔しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4066q/>

フリーター兼魔法使い

2011年6月20日14時55分発行